

第8回 蘇東坡は。パワハラ知事とのごたごたを語った

——兀坐枯株の如しこつざ ことしゆ ごと

2017年2月28日（火）。

「叔父さん、これ読んだかなあ？」

イノ君は。ポケットからくしゃくしゃになった新聞の切り抜きを取り出した。ちやぶ台の上で。ごしごししわを伸ばそうとし、置いたばかりのコーヒーがこぼれそうになった。

「そのままでもいいですよ」

「ほら、ボクって几帳面な人じゃないですかあ」

「その割には、ぞんざいにポケットに突っこんであったみたいですけど」

見ると、人生相談の記事で、

「これって、落語家の立川談四楼たてかわだんしろうが答えるコーナーですよ。一昨日の毎日新聞

でしょう」

「やっぱ見たんだ。そんなもって、身につまされなかった？」

「わたしがですか？ えーと、相談者は35歳の男性で、アルバイトをしながらシンガー・ソングライターを目指していると。デモテープをある歌手に送ったら、『音痴だからミュージシャンには向かない』って言われた。でも、負けたくない」と。そうそう、ここまで読んで、だったらなんで相談するのかいなと思って、回答の方はちゃんと読まなかったです」

「音楽を小説に置き替えたら、叔父さんとそっくりじゃない？ だから、線かな

んか引いて、一生懸命読んだんじゃないかって思ったんだ」

「似てますかねえ？」

「小説では音痴とは言わないだろうけど、何がおもしろいのかさっぱりわからない古い中国の話なんか書きちゃって、やっぱかなりの調子はずれだよ」

「音痴だからって歌ってはいけないことはないですよ。この人は音楽活動がしたいのですよね。だったら、すればいいだけじゃないですか。相談する意味がわからないです。回答にも、『しつこくインディーズでやるという道もあります』って。

それに尽きますよね」

「でもさあ、やっぱメジャーデビューとかしたいんじゃないの。アルバイトで食いつなぐんじゃないかってき、ちゃんと稼ぎたいんだよ」

「それだったら話が違います。稼ぎたいってことなら、その方法をそれとして考

えないといけませんよ」

「稼げてこそ本物ってこともあるんじゃないの。メジャーデビューすれば、自分の音楽でたくさんの人を感動させられるってことにもなるだろうしね」

「それも話が違います。音楽活動をしたいというのからどんどんずれていきますよ」
「よくわかんないなあ。叔父さんはどうなの？ 小説で稼ごうとは思わないの？ 感動してもらいたとか考えないの？ 最初からあきらめてる？ その方がムダに苦しまないでいいもんね」

「ウンコがしたくてウンコをする。そのときにウンコで稼げなくては本物のウンコではないとは誰も考えませんよね。ましてウンコで感動させるなんてありえませんが」

「なんでここでウンコが出てくんの？ ウンコとかシッコとか、幼稚園児じゃな

いんだから」

「トバー君はハエを吐き出すって言ってますよね。トバー君にはるかに及ばないわたしは、ぐっとへりくだってウンコにしてみましたです」

「生理現象のように小説を垂れ流してること？ それじゃあ、読まされる方はたまつたもんじゃないよね」

「心配無用。このごろはイノ君のおかげで、ホームページへのアクセス数が2桁に乗ったりしたのかもしれないですけど、間違っても私の小説を読もうとする人はいないはずですよ。調子っぱずれの歌をむりやり聞かせていやーな思いをさせるカラオケハラスメントのようなことはしていないと自信を持って断言できます」

「だれも読んでいないと言い切っちゃって、だったらなんで書いてんのかかわかんないんだけど」

「わたしは物書きに似ざる者、あるいは物書きではない者に似ざる者ってことな
んでしょうか。つまり、こういうことでしょうか。

いったいおいらは何もの？

物書きに似たもの？ 物書きにはあらざるものに似ざるもの？

筆を折ったら折ったで、だれもおいらを惜しみはしません。

職をなげうって出て行った路の辺、

そこにきつとあったのでしょうか、確かな思い？

才はなくても思いはあります。

きりきりとねじりあげるおいらの脳味噌、

ぼんやりとふぬけた眼差し、

見ようとしてやはり見てはいないのです。

万里の彼方へとネットに乗って行く夢、

尋ね行くのは誰かのところ、

でもアホらしいとイノ君に起こされるのです。

おわかりいただけましたか？」

「いまのはさあ、この前のトバー君の詞のパロディだね。意味はよくわかんないんだけど、うちの叔父さんがこんな作ったよってトバー君に教えちやおうかなあ」

「それはやめてください。私はイノ君と違って、蘇東坡を偉大な人だと思っているので、こんな下らないことをしていると知られたくないですよ」

「と言うところみると、叔父さんもトバー君が蘇東坡本人だと認めてるってことだよね」

* * *

——**こ**ういうのってあんましょくないってわかっているけど、他人のごたごたってなんか興味をひくんだよね。週刊誌の宣伝ってうまくできてるよね。「超難関試験を突破した超エリート官僚のお寒い仕事ぶり」とか書いてあったら、のぞいてみると、たくなったりするかもね。「超エリート」ってだれのこと？ 超エリートが実はトデモだったなんていうのはさ、庶民としては、「ほら、いわんこっちゃない」って、ヘンな優越感にひたれたりするじゃん。

悪趣味だけど、続きを楽しみにしてたってことはあるかもね。トバー君が盛

り上げられるだけ盛り上げといたんだから、やっぱ楽しみにしてなきゃ悪いしね。「他人の不幸は蜜の味」とか言うよね。そういういやらしい心理が自分にもあるっていうのはちゃんと認めておかないといけないよね。自分は関係ないと思うのが、結局はイジメを傍観する心理につながったりするもんね。

というわけで、5月病が治らないトバー君の前におっかない上司が現れて、どんなことになったの？

㊦ ちん きりょう 陳希亮ほうしゅう 新知事が鳳翔府に赴任して私がどうなったか、次の三択で推測して

いただきましようか。(A) 5月病が重症化して離職した、(B) 新知事と大喧嘩をして5月病は治った、(C) 酒を酌み交わして新知事と仲良くなり5月病は寛解した。どれだと思いますか。

——四つ目の選択肢として、(D) トーバー君をひいきする都の人たちが動いて、新知事をよそに飛ばしたっていうのはないの？

ボクだったら、いきなり部下を杖で打ちのめす暴力。パワハラ上司のもとでなんか働きたくないから、5月病になっていなくても速攻でやめちゃうけどなあ。トバー君のことだから(C) っていうのもありそうかな。宴席でだれもがいやがる。パワハラおじさんの隣にあえて座って、得意の詩かなんか贈呈して、いい気分させたりしちゃってさ。でも、そんなんだと、あれだけ盛り上げておいたにしては話がつまんないから、わかった、正解は(B)だね。どんなケンカをしたの？

Ⓣ 吏人が打たれたと聞いて、これは面倒なことになりそうだ、この先つまらな

い目にあわされることになるのなら、どうして早くに郷里に帰ることを本気で考えておかなかったのだらうと思いました。郷里を思う気持ちはずっとあったわけですから。

とは言え、初めから逃げ腰なのもどうかと思い、まずは杖で打たれた当人を呼んで何があったのか聞こうとしました。それは私の部屋にも時折顔を見せ、比較的よく知っている男でしたが、傷が痛むからと言って現れませんでした。ほかの者に聞こうとしても、誰も来ようとしませんでした。

——そりやそうかも。トバー君に泣きついたとか、ちくったとか、おっかない知事に知れたらやばそうだもんね。

㊦ 吏人たちは杖の一打ですっかりおびえていました。前回の終わりに陳知事の伝記を聞いていただきました。当時の私はそこまで詳しくは知りませんでした。立派な実績の持ち主であると理解していました。それがにわかには疑わしくなりました。上から権威をふりかざし、力づくで押さえ付けて来ただけの人ではないのかと思えたのです。

——赴任初日に、ワハラ全開っていうのはひどいもんな。それって、逆に言うところ、愚かさの証明みたいなもんだよね。

でもさあ、「上から権威を」って言ったけど、前回ボクがデビューアルバムを批判したのは、トバー君に、下から目線が欠けていたんじゃないのってことだったんだけど。

㊦ 吏人と、私のような官員とでは画然とした身分差があるということとは前にお話しました。私は、吏人とは風通しのよい関係でなければならぬと考えていました。官員は吏人の協力がなければ仕事できません。官員と民衆をつなぐのは吏人です。官員と吏人が反目し合っていたら民衆のためになりません。私は意識的に吏人と親しくしようとして、馴れ馴れしくし過ぎたかと後に反省しました。ですから、少なくとも上から目線ということはないと自分では思っていました。

吏人たちのおびえる様子から、私の胸に陳知事に対する怒りが湧き始め、翌日、陳知事と初めて一対一で話をしました。私は知事の補佐役として、前知事からの引き継ぎ事項について新知事に説明しました。最初は淡々とごく事務的なやりとりでした。陳知事は一つ一つの説明に対して必ず何かしら質問を返して来ました。

私は心身の不調が続いてはいても、知事に代わってたくさんの公文書を書き、たくさんの書類に目を通していましたから、何を聞かれても返事ができないということはありませんでした。質問は次第に細かくなり、いかにも重箱の隅をつつくような感じになって行きました。

——大ゲンカの前の軽いジョブって感じかな。

① 陳知事は早口になり、それを上回って私も早口になり、陳知事は私が答え終わる前に次の問いを発し、問いが終わる前に私は答えを返し、互いに声の大きさまでも競って、質問と答えが目まぐるしく交差しました。

しばらく続いたところで、陳知事はひと声張り上げ、

「では、いまは水が足りていないのだな」

そのとき私は別の事柄について説明していたので、思わずきつとなって陳知事の顔を直視しました。ただ単にやりこめるために問いを連発していたので、私の答えなど初めから聞く気がないのです。

私は春になってから雨が降った日付を正確に並べ、

「これまでのところ水が足りていないという状況にはなっておりません。夏の麦の収穫はほぼ昨年並みで、秋の収穫もほぼ同様に見込んでおります」

麦の収穫量を具体的に並べると、

「わしは鳳翔府が管轄する土地に入ってより雨を見ていない。今日も晴れた。これはどういうことなのだ」

「通例夏には雨があります」

「二昨年は春からずっと雨がなく、そのために昨年の春には旱魃を心配したのではなかったのか。夏に雨が降るとは限らない。秋の収穫まで十分に見通せて初めて水が足りていると言えるのではないか」

「確かにここしばらくは雨はありません。しかし、このままの状態が続くと限るべきではありません。天が落ちて来るのではないかと心配した杞きの国の人をまねなければならぬ必要はなく、現時点で水が不足しているとの認識はないのです」

「認識がないとは、見るべきものを見ていないということではないか。いよいよとなったらお得意の神頼みか」

陳知事がせせら笑うように言ったので、

「たいはいくざん 昨年の春に太白山の神に祈り、幸いにも雨に恵まれ、旱魃の害に見舞われずにすんだのは、鳳翔府の誰もが知ることです。だからと言って、神頼みで万事乗り

切れると考えているわけではありません」

このときにはすっかり喧嘩腰になっていました。

「たまたま雨が降ってくれたからいいようなものの、もしも旱魃になっていたらどうするつもりでいたのだ」

「鳳翔府には万一のための食糧の備えがあります。それを適宜放出して、民衆が飢餓に陥らぬよう、また諸物価が高騰して民衆の生活が破壊されないよう、種々の方策を採ったでありましょう」

「食糧の備えはどれだけあるのか」

その数量を即答すると、

「それは間違いなく倉庫にあるのだな」

「毎年きちんとした報告が上がっております」

「誰の報告だ」

備蓄庫を管理する役割の官員と吏人の名を挙げると、

「そなたは実地に検分したのか」

「備蓄量は二重に点検されており、数字と実量に相違はないと考えます」

「検分したのかと聞いておるのだ」

「私が備蓄庫に参りましても、実際の数量を測定するのは容易ではあるまいと思

います」

陳知事は手を振り上げ、

「もう下がってよい。そなたに尋ねても時間の無駄だということがこれでよくわかった」

私はいきなり部屋から追い出され、昨日に始まった怒りが何倍にも膨れ上がり、

自分の部屋に戻っても、苛立ちが募るばかりで、備蓄に関する書類を見直して自分が口にした数字に誤りがないのを確認すると、官舎の外に飛び出し、馬正卿ばせいけいを呼び、馬を曳いて来させると、即座に鞭を当てました。

備蓄庫まで馬を疾走させますと、倉庫を管理する吏人は突然の訪問に驚き、あわてて管理簿を差し出しました。無作為に一つの倉庫を選び、

「ここに案内してほしい」

倉庫の中に入ると、うす暗い通路を歩き、ただちに高さ、左右、奥行きを測り、ざっと計算すると、数量はおよそ合っていると確かめられました。陳知事に向かつて、数量を測定するのは容易ではないと言ったのを後悔しました。

——意地を張って、自分は完璧だと見せつけるのって、なんか疲れそうだけど。

㊦ 倉庫から出ると、汗びっしよりの馬正卿が門の外に立っていました。私の後を追って、6月の炎天下を自分の足で駆けて来たのでした。

「よくここだとわかったな」

「若旦那様のなさることですから」

「ならば、これからどうすると思う」

「もしものときにここを襲うとしたらどこからなのか、見て回るおつもりでありますしょう」

「なんでもわかってしまうんだな。ならば、見るまでもなく、そなたに尋ねるのが早そうだな」

「若旦那様が民衆の先頭に立って備蓄庫を襲うのであればお教えいたしましょう。」

警備の手薄な箇所を知事に問われたら即座にお答えしようとの心積もりであるのなら何も申しません」

「それはどういふことか」

「隋朝ずいの末期、政治は乱れに乱れ、民衆は飢餓に苦しまされました。国が管理する倉庫には、民衆から取り上げた食糧が溢れんばかりに積まれていて、国はそれでもさならなる搾取を続けていました。そのようなときに、李密りみつは巨大な倉庫群を襲つてその扉を全て開き、民衆に好きだけ持つて行かせました。十日余りで李密のもとに二十万人以上が集まり、一時期は天下をうかがう勢いとなりました。民衆が飢餓に迫られたときに備蓄庫の門を守ろうとするような国は亡びるのでよろしいのです」

その答えにうなずき、私は馬正卿とともにゆっくりと馬を歩ませて引き上げた

のでした。

——フランス革命も食糧不足から始まったんだよね。「パンがなければケーキを食べればいいじゃん」って、マリー・アントワネットっていう人が言ったんで、パリのおばさんたちが怒ったんだよね。

㊦ 翌日、ある事案について、鳳翔府としていかに対処すべきかを記して明日提出するよう陳知事に言われました。私は即座に検討し、その日のうちに書いて持って行くと、

「明日と言ったはずだ。そなたは一体何を聞いていたのだ」

不快感を露わにしたので、私もむっとし、そのまま引き下がるのではむしろく

ないと、

「備蓄庫を確かめてまいりました」

数字を並べようとすると、

「聞いてもないことを話す必要はさらさらない。つべこべ言わずに明日来るがいい」

——チャンチャンバラバラになってきて、おもしろいね。そこで、どうなった？

㊦ 翌日に改めて書類を持って行くと、目もくれずに脇に押しやり、

「これは明日までに見ておく」

そして、別の事案についての指示がありました。つべこべ言うのは控えようと、

そのときはすぐに下がりました。

その翌日に新しい書類を提出しますと、同じようにしてまた別の指示がありました。

「どうした。もう話は終わっておるぞ」

私がすぐには下がらないので、陳知事は手を振って押しやろうとしました。

「昨日の書類はご覧いただけただけのでしょうか」

「同じことをまた言わせるのか。聞いてもないことを話す必要はさらさらない。つべこべ言わずに明日来るのだ」

問答無用に言い方に、怒りはさらに何倍かになりましたが、一応立場をわきまえて退きました。

翌日も同じで、さらにその翌日も同じだったので、

「これまでの事案はどうなったのでしょいか」

数度にわたってしつこく尋ねますと、

「どうしてわからないのだ。わしは毎回言っているではないか。『明日までに見る』と。だから全て見ているのだ。見た上で新しい案件を出しているのだから、考えればすぐにわかるではないか。言うまでもないことなのだが、言わなければわからないというのなら、言うしかあるまいか。要するに、全て使い物にならない。だからといってそなたを遊ばせておくわけにはいかない。それで新たな事案をわざわざ用意してやっているのだ」

「私の書類に何か不備があったのでしょいか」

「よいところがあつて悪いところもあるのを不備と言う。残念ながらそういうことではない。全てが悪い」

私はぐっと気持ちを抑え、

「何がよくなかったのでしょうか。教えていただければ直します」

「教える？ 誰が？ このわしがか？ 制科の試験に第三等で合格したそなたに、わしごときに教えられることは何一つない。さっさと下がるがいい」

——あははは、とうとうパワハラ知事の正体が知れたね。トバー君の才能に嫉妬してたんだ。つまらないオヤジだ。

① 新たな事案についていままですら以上に入念に検討して書類を作成し、翌日持って行きました。すると「控室で待っておれ」と言われ、後は待てど暮らせど声がかからず、そのまま半日が経ち、夕方近くになってやっと通されたかと思うと、

やはりいままでと全く同じで、すぐに部屋から追い払われたのでした。

私は怒り、そして呆れました。その翌日も同様だったので、控室でこのような詩を作りました。

知事に会おうと控えて待つ。

いつまでも呼ばれない。

だからと言って帰ってしまうわけにもいかないから、
枯れた切り株のようになってじっと座っていよう。

知事は私のいることなど忘れてしまっているのだろう。
だったら私も私のいることを忘れてしまうのがいい。

そうすれば本当の枯れた切り株がここにあるだけとなる。

人々はそうしたことを理解しないので、

ひげをふるわせて私のために怒ってくれもする。

しゃあん

その昔、謝安が当時権勢を振るっていた將軍に会おうとして、半日待っても呼ばれないことがあった。

一緒にいた王坦之がこらえられずに帰ってしまったおうすると、

おうたんし

「ほんのひとときの辛抱と命を引き換えにする気ですか」

そう言って、その後も悠然と待ったという。

私には命の心配まではないのだから、

辛抱するまでもなくただの切り株になっていればいいのだ。

——待たされながら詩を作るなんて、ちよつとした余裕かも。切り株になるのつ

て、たいしたサトリみたいじゃん。

㊦ もとの詩は、「客間でうたた寝をする」という題で、切り株の部分は、

兀坐如枯株（兀坐 枯株の如し）

です。兀坐とは、こうやって肩を怒らして座る感じですが。実際にはなかなか枯れた切り株にはなれません、いらいらしながら居眠りをしていたというわけです。

——この前聞いたのでは、ほかの同僚とはうまくいってなかったって話だったけど、トバー君のために怒ってくれる人もいたってことみたいだね。どういう人

たちが味方になってくれたの？

㊦ 味方ということになるのかどうかはわかりませんが、同僚や吏人の何人かが、知事のやり方はひどすぎると慰めてくれたり、怒ってくれたりしました。これままで親しくなかった人までもがそうするので少々意外な感じがしました。

詩で謝安という人の名を挙げました。これは少々説明が要ります。謝安と自分を引き比べるのはおこがましい限りですが、官僚の身として苦しい立場に置かれたときに、謝安に思いを馳せるということがこのころから始まりました。謝安は私より数百年昔の人です。大貴族の出身で、大変な文化人であり政治家でした。私とはかなり異なります。

謝安のころは皇帝の権力はそれほど強くなく、貴族と軍閥の力関係のバランス

の上に巧みに乗ることで権力を保っていました。当時、中国の北半分は異民族によって支配され、漢民族の王朝は中国の南半分に押しやられ、常に北からの脅威にさらされていました。そのために、軍閥の長が軍事的成功をおさめると、皇帝の地位を奪い取るということになりがちでした。

私が詩に詠み込んだのは、謝安がある將軍と会うことになって、いつまでも長々と待たされたという場面でした。その將軍は、皇帝の座を狙う軍閥の長の腹心で、朝廷に圧力をかけるために都に乗り込んで来たのでした。將軍はことさらに横暴に振る舞い、それに怒って下手なことでもしようものなら、そこに付け入ろうというのでした。謝安は延々と待たされ、怒り出した王坦之を抑え、耐えに耐えて、王朝を守り通しました。その後、北方から大軍が押し寄せて来たときには、軍閥に頼らず、国家の一大事を甥に委ね、わずか10分の1の兵力で奇跡的勝利をも

のにして国を救ったのでした。

謝安の辛抱に比べたら、知事の仕打ちくらいで腹を立ててはいけなないと、いまの詩を書いて自室の壁に貼って我が身を戒めていますと、妻が、

「ひとつだけお尋ねしてもよろしいでしょうか」

と、遠慮がちに聞いてきました。

——いよいよ奥さんの登場だ。奥さんのことは後でって言わてたからずっと気になっていたんだ。奥さんがどういう人かもまだぜんぜん聞いていないし。

㊦ 妻はあなたと同じように、私のために怒ってくれる人がいるのか、それは誰

なのか尋ねて来ました。私が何人かの名を挙げると、妻は顔を曇らせ、少し考え

てから、

「申し訳ありませんでした。いらぬことを申し上げました。お許しください」

頭を下げ、そのままうなだれて部屋を出て行きました。

——言いたいことがあったけど言わなかったんだね。昔の女の人って思っ
ていてもなかなか言えなかったんだろうね。でも、いまだって、職場のごたごたで悩
んでいる。パートナーに、あの人はいいとか悪いとか、勝手に口をはさむのはあんま
しよくないのかもね。職場の実態がわかっていなくてもないのにさ。

㊦

地方の官舎は住居であり仕事場でもありましたから、同輩や吏人について妻
も何も知らなかったわけではありません。妻の眼に人々がどのように映っている

のだろうとか、そのとき初めて考えてみて、あるいは妻の方が正確に見ているのではないかと、私は思いました。

というのも、私はかつて父に言われていたことがあったからです。それは、科挙に合格してすぐに母が亡くなり、急ぎ郷里に帰る旅の途中でのことでした。

「そなたの母は、『そなたが范滂ほんぽうになれてこの母が范滂の母になれないことがあるるか』と言ったと聞いている。母が息子を見る目には、残念ながら厳しさが足りなかったと言わねばなるまい。この父にしても、立派な成績で科挙に合格した息子にはつい甘くなりかねない。だからこそ言っておきたいことがある」

范滂のことは前にお話したと思います。

——国の政治を批判したために罪を被せられた人だよね。いまでいうと、共謀罪

みたいなものにひっかけられたってことかな。そのことをお母さんから教わったんだよね。

① 父は厳しい顔でこのように言いました。

「わしが見るところ、そなたが范滂になれないとは言わぬが、王衍であれば容易おうえんになれるであろう。しかし、まかり間違つても山濤さんとうにはなれない。現にそなたは若い王衍と肩を並べつつある。されば、范滂からは遠とほざかりつつあるのではなからうか」

私は心の中で「そのようなことはない」と反発し、しかしそれがすでに心の奢りおごりで、自分が王衍になりかけている証左なのではあるまいかと、父の言葉を胸の奥にしまい込みました。ところが、しまい込みすぎたのでしょうか、妻とのこの

一件があるまで思い出すことはなかったのです。

山濤と王衍について説明します。山濤は范滂よりも百年余り後の人で、そのころ貴族の間では清談せいだんというものがはやっていました。清談とは、俗世間から遊離した哲学的な座談で、おもに老子らうしや莊子そうじの思想に基づいて高踏的な議論を交わしていました。「竹林の七賢」といわれた人たちが清談の名手として知られ、山濤はその1人でした。「七賢」の清談には、俗世間の醜悪さに対する批判という意味合いが強くなりましたが、「七賢」の亜流たちは世の流行に乗って、清談の技で名声を得ようとなりました。王衍はまさしくそのような人物でした。

王衍は幼いころに山濤のもとに連れて行かれ、山濤は「いったいどのような母からこのような子が生まれたのだろうか」と、王衍少年の才智にいたく感心しました。王衍はたちまち世の耳目を集め、出世階段を一気に駆け上ったのでした。

——トバー君のお父さんは、科擧に合格して都の人々から注目され出したトバー君に王衍に似るところがあると感じたんだね。で、王衍は才能はあつたけれど、どんな人だったの？

㊦ 山濤は幼い王衍の才能に感心しただけではなく、「天下の人民を誤らせるのはきつとあのような者であろう」とつぶやいたと言います。

王衍は日々清談にふけりつつ国家枢要の地位にまで昇り、その後にはつと高位高官を目指す者は皆清談に熱中しました。そうになると、政治の方はおろそかになり、外敵の侵入を許してしまいました。都に迫って来た敵軍と最後の大決戦となり、その指揮をしたのが王衍でした。清談は得意でも軍の指揮者としては無

能で、王衍は大敗し、捕らわれの身となりました。敵の皇帝の前で、「私はもともと政治がしたかったわけではなく、まして戦争など全くしたくなかったのです」と、王衍はおろおろ泣いて命乞いをしました。敵の皇帝は呆れ、このような無責任な男の首を切ったのでは刀の穢れになると、王衍を壁の下に座らせ、壁を倒して圧死させたのでした。

——ふーん。トバー君も、本当は隠者になりたかったって、弱音をよく吐くから、お父さんは、王衍にならなれると言ったんだね。ボク個人としては、そういう軟弱なほうが好きだったりするけどさ。きつと芸術家とかならそれでいいんだけど、国の責任ある立場の人だと困るかもね。

㊦ 父がまかり間違っても山濤にはなれないと言ったのは、「天下の人民を誤らせる」と見抜いた眼力が私にはないということでした。端的に言って、私はすぐに人を信用してしまうということです。うなだれて出て行った妻の後ろ姿を見送りながら、そのことをしみじみと思い、山濤のようになろうとするのならせめて妻を見習わねばならないと考えました。しかし、結論から言うと、それはあきらめた、と言うよりは、山濤にはなるまいと思っただけでした。

——— どういうこと？ なんでも信用して、ナントカ詐欺にころっとだまされるよ
うなお人よしでもいいってこと？

㊧ その通りです。山濤になろうと努めるのは、私にとって大切なものを失うこ

とになるからです。

「ありのままの姿見せるの

ありのままの自分になるの

——なんで急に歌うの？ トーバー君って、実は『アナと雪の女王』のファンだった？

① ジョン・クレアの詩が「俺は生きている」と訳されていたからイノ君をひきつけたように、「Let it go」が「ありのまま」と訳されたことで、日本でたくさん人の心をひきつけたのではないのでしょうか。自分を抑えて生きなければいけな

いという現実の強い束縛感から、この歌がひとときでも解放してくれるように感じる事ができるのしよう。

——ありのままにすることにあこがれはしても、現実には厭しすぎるよね。ボクだって、イジメとかたつぷり経験して、とにかくまわりに合わせないとダメってことを知ったもの。就活だってリクルートスーツ着て、企業に期待される通りの学生を必死に演じないとならなかったし。会社に入ったら入ったで期待される通りの新入社員を演じないとならないんだよなあ。期待に応えようとして、自分を抑えすぎたら、ウツを発症したり、最悪過労死だよ。そういう社会なんだよ。がんばらめのウツプンを、ネット上で弱そうなヤツに向かって吐き出して、炎上させたりしてさ、くっだらねえんだよなあ。

㊦ ありのままではいけないと己を規制するのは、二重の意味で信頼を放棄することを意味し、だから苦しくて、ヘイトまがいの行動に出たりするのでしよう。

——えーと、それは、自分への信頼と、社会への信頼かな。ありのままに振る舞ったらずい、イジメられると思うのは、社会が信頼できないから、ありのままを隠そうとするのは自分が信頼できないから。そういうことだね。

そういう苦しさにも無感覚になるまで己を抑制するっていうのが、問題解決の一つの手段なんだろうね。国が道徳教育に期待しているのは、たぶんそういうことなんだろうなあ。関係ないかな？



自分の本性が善であるとするのは、自分への信頼のあり方の一つとしてあるのではないでしょうか。孔子や孟子は根底的には人の本性は善であるとの確信を持っていました。善とは何かということを議論し出すと長くなるので今夜はやめておきます。社会を信頼するとは、やはりその基盤が善にあると思うことではないでしょうか。何度かお話しているように、宇宙の根本原理である道に則ればよろしいというのは善への信頼と言ってもいいでしょう。

山濤は非常に厳しい時代を生きたために、二重の信頼を持つことができず、人間を疑い、社会を疑い、高踏的な哲学談義に逃避しました。山濤は自覚的にそのようにしていたので、政治家として冷徹な判断を下すこともでき、また王衍の才知が上辺だけのものであると見抜くこともできました。

しかし、王衍少年を見て、「将来国を誤るのはこの子であろう」とつぶやくのは悲しくないですか。王衍少年に才能があると見たら、本来備わっているはずの善を十全に發揮できるように、つまり、「ありのままの自分」になれるように導くべきなのではないでしょうか。

私は山濤にはなるまい、全ての人の本来的な「ありのまま」、社会の本来的な「ありのまま」に信頼を置こうと思ったのでした。

——それってさあ、ちょっとカッコいいように感じるけど、すっごい理想主義だよね。真黒な悪意を隠して善良無垢のような顔をして近づいてくる人も実際にはいるんだから。隣の隣の国の異母兄弟殺しの事件なんか見ると、人の本性が善だとは信じにくくなるんだけど。

㊦ 権力者の最大の強敵は兄弟であるとして、古い古い中国では、権力を獲得するため、あるいは安定させるために兄弟殺しがしばしば行われました。山濤はそういう現実を見ていました。現実の醜さに暗澹たる思いになるよりも、逆に、より強く理想主義でありたいと私は思うのです。孔子も孟子もそうでした。

——パワハラ知事さんも本当は善人だってことになるよね。そう思い返したら、パワハラ知事さんと急に仲よくなれて、メデタシメデタシってことになったって
いう話？

㊦ 陳知事の振る舞いに悪意を見ることはしまいと努めました。が、ぎくしゃくし

た関係が続きました。私が提出した書類はことごとく陳知事のもとに留め置かれ、呼ばれても毎回のように延々と待たされ、ひたすら切り株になって衝突することだけは避けていました。

ある日のこと、陳知事はある町のある人物の名を挙げ、

「いまこの者はどうしているか」

咎めるような口調に対し、その名は記憶にないと冷静かつ正直に告げました。

知事は一冊の帳面を乱暴に押し出し、

「知らぬとは言わせぬぞ」

見ると昨年の始めに減刑のために回ったときの名簿で、いま告げられた人物の名が隅にありました。私の筆で減刑の度合いが書き込まれていて、それはある基準に従って記したままで、囚われ人の名をいちいち記憶に刻んだりはしていません

んでした。

「このときは急ぎ六つの県を回りまして……」

言いかけたところで、見苦しい言い訳はすまいと口を閉じました。

「たくさんの中の1人だ。覚えてなどいられないと言いたいのか。そなたは覚えていなくても、そなたの名を決して忘れぬ1人もいる。そなたがそこに書き込んだお蔭で解放された者にはそなたへの感謝など初めからなかったとしても、そなたのお蔭で嘆きの底に突き落された者はそなたへの恨みの念を日々深めずにはいられない。それ自体は理不尽であっても、それ以上の不条理にさらされているのだから、そうならざるを得まい。何も知らずにいるとはまことに幸せであるな」

「何をおっしゃっているのか理解できていないのですが」

「府の門の外で泣いている女がいる。その女に聞け。明日の朝までに、府として

いかなる措置をすべきか書いてここに持って来い。そうすればすぐに読んでやる。遅れたらそれまでだ」

陳知事の言ったことが理解できないままに門に向かうと、泣きながら立ち去ろうとしている女性の後ろ姿がありました。小走りで追いかけて、声を掛けると、びくと身をすくめ、すぐに一目散に駆け出しました。追うと、女性は悲鳴を上げてころび、地面にうずくまりました。近寄ると、身を縮め、声を掛けると、ひどくおびえた様子で泣き始めました。私はとまどい、その傍らに立っているよりありませんでした。

そこに馬正卿が来て、私の袖を取り、

「この場はわたくしめにお任せください」

私は役所に押し戻され、かなり経って馬正卿が来て、女性から聞いたと、次の

ようなことを話してくれました。

陳知事が名を挙げた囚われ人は、数々の悪業を重ねながらも町役人とするんで処罰を逃れ、何人もの財産ばかりか命さえも奪っていた悪辣な男でした。女性の父が動かぬ証拠を掴んで県知事に訴え、ようやく御用となって牢に繋がれたのですが、町役人にかばわれて死罪を免れ、私が見た書類も改竄され、釈放となったのでした。男は牢を出ると女性の父に意趣返しをし、父は獄中で命を落としました。一家は財産を奪い取られ、女性は身の自由を失い、買われた先から決死の覚悟で逃げ、父の冤罪を晴らそうと府に訴えに来たのでした。しかし、手荒く門前払いを食わされ、府の知事はとんでもなく恐ろしい人で、その補佐役は仇と思う男を釈放した人だと聞かされ、絶望に沈んで泣く泣く去ろうとしていたのでした。

馬正卿が都の太学たいがくを批判して行商人になっていたということは前にお話したと

思います。そういう馬正卿であるから、女性から詳しい事情を聞き出すことができたのでしよう。

私は馬正卿の話をもとに書類を作成し、翌朝一番に陳知事のもとに行きました。珍しいことにすぐに通され、

「読んでやるからそこにいろ」

手に取ってほんの一瞥をくると、机の上をすべらせるようにして投げてよし、

「何だこれは。科挙の答案のつもりか。いつまでもその癖が抜けない。女が言いもしないことを作ってはならんくらいのことともわからんのか」

「いえ、女が述べたままを記しました」

陳知事は机を強くたたき、

「全くもって使いものにならない」

——なにもいまトバー君が本当に机をたたかなくても。ほらあ、小皿がはねて、醤油がこぼれちゃったじゃん。ライチ・サワーでも飲んで、落ち着いて。

あのですね、叔父さんから聞いたんだけど、昔の新聞社では、新米記者が書いた原稿を、先輩記者が見もしないで、ぽいとゴミ箱に投げ捨ててしまうなんてことがあったんだって。見る価値さえもないってことなんだろうね。どこが悪いとか、どう直せとか、ぜったいに教えてくれないんだって。昔はそんなふうにして育てたらしいんだけど、いまではありえないよなあ。

で、パワハラ知事さんは、トバー君が試験でウソを書いたのを知ってたんだね。



私は枯れた切り株ではいられなくなり、

「これがいけないのならどうしたらいいのですか」

負けじと机をたたいて知事を睨み付けました。どうせいままでと同じ、「制科ま
で合格した者に教えられることはない」という答えが返って来るに違いない、そ
のときはもうケツをまくってやろうと、言うセリフを用意していると、

「よろしい、そこにある墨をすれ。終わったら、その紙をここに広げろ」

思わぬ指示に、とりあえず部下として言われた通りにすると、陳知事はじつと
紙を見ながらしばらく氣息を整え、やにわに筆を執ると、さらさらと流れるよう
に書き進め、その筆先から生まれ来る文字を追いつつ、私は冷水を浴びせられた
ような気持ちになりました。

陳知事は私の書いたものをほんの一瞬眺めただけでした。なのに、複雑な事実関係を正確に掴み取っていて、私が書いたよりもずっと簡潔にまとめ直し、特に私が力を込めて書いたところをことごとく削り落としていました。女性に同情しかつ自分の落ち度を取り戻そうとするあまり、筆に勢いがあり過ぎたところがあつたと私は認めないわけにはいきませんでした。

「地方の珍談奇談を都の人に伝えるのならそなたの書いたものでもよいだろう。科挙の答案ならそなたの力量を十分に見せつけることにもなるう。これは正式の公文書になる。府としての決定がこれで下され、誰かの人生が変わる。事実であるとの確証がないことで混濁させてはならない。この事案はそなたには任せられない。後はわしが措置する。その代わりと言うのではないが、そなたに二つの任務を与える。二つを完全に終えるまでわしの前に顔を見せるのは無用だ」

——ワハラ知事さんも、ただのいばりんぼではなかったみたいだね。そんなでも、任務が終わるまで顔を見せるなっていうのはイヤミっぽいかもね。どんな任務だったの？

㊦ 第一の任務は雨乞いでした。夏になっても雨がなく、再びの神頼みが効くものかやってみよというのでした。

第二の任務は御陵を作るための木材の搬出でした。仁宗皇帝じんそうが亡くなったことは前回お話ししました。スーパースターの剛腕韓琦かんきの総指揮のもと、仁宗皇帝の埋葬場所の工事が急ピッチで進められ、鳳翔府には、山から木を伐り出して期日までに現場に運ぶように指令がありました。陳知事は必要量を各県に振り分け、そ

れが滞りなく運び出されるよう実地に見て回るといのが私の役目でした。

朝廷から指示のあった調達量を見て驚きました。雨が少しでも降らないと旱魃を心配しなければならぬ状況にある鳳翔府では、植林こそが喫緊の課題で、大量の木を伐り出すのは災害に対する脆弱性をさらに高めることとなります。その上、雨がなくて流量が減った川にもしも木材を流す力がないとなったら、運搬の労力は何倍にもなってしまう。私は、つまり、環境を破壊し、民衆を酷使する任務を与えられたのでした。

——そういえば、このごろはパワハラ上司だけじゃなくて、クラッシャー上司っていうのもいるっていうのが話題になっているらしいね。部下に無理難題を与え、次々に潰して、それを推進力にして出世して行くのがクラッシャー上司なんだっ

て。業績を上げろってメチャクチャせめたり、言う通りにできない部下をねちねちいじめたり、できるヤツにはどんどん難しい仕事を与えて過労死するくらいにまで追い込んだりしてさ。上からはそういうのが指導力があるって見えたりするんで、部下を潰せば潰すほど出世しちゃうんだって。すつげえタチ悪いよね。トバー君とこの知事さんはクラッシャー上司だったのかも。いきなり杖で叩いたりってというのは、クラッシャーっていうのにぴったしじゃん。

Ⓣ かつてスーパースターたちが国政を改革しなければならなかった背景に

さんじょう

「三冗」がありました。「三冗」とは三つの過剰なもの、「冗官」「冗兵」「冗費」

です。御陵建設に多大な出費をするのは「冗費」に輪をかけるものです。さらに、

仁宗皇帝は着古した衣類を身に付けるような儉約家でしたから、壮麗な御陵を築

くことは生前の意思に反する、御陵計画は大幅に縮小すべきだという批判的意見が、多数韓琦に向かって出されました。その急先鋒が実は我が父で、韓琦はそうした批判を無視できず、縮小を約束しました。しかし、実態としてはほんのわずかな変更をただけで、鳳翔府には莫大な量の木材が課せられたのでした。

我が父が強く反対したことに従事しなければならぬというのは、息子としてかなりの抵抗感がありました。しかし、官僚になったからには、自分個人の考えと国の方針が異なっても、粛々と任務を遂行しなければならない場合もあるというの、もとより覚悟していなければなりません。それができないのなら辞めるしかありません。せめて現場において何かしら軽減措置が採ればと、嘉祐かゆう八（1063）年の7月の終わりに私は鳳翔府を発ちました。

最初に、たいはくさん 太白山の神に雨を祈りました。昨年の春にはすぐに雨が降りましたが、

このときはいくら心をこめて祈っても雨の気配は全くありませんでした。雨は自然現象で、人の祈りとは無関係なので仕方のないことではありますが、人々のためにというのが七分、そして三分ばかりは陳知事に負けたくないとの思いから、懸命に祈りました。それが邪念だということであったのか、虚しく干天を見上げる日々が続きました。もしかしたら太公望たいこうぼうに祈ったらよいのではなからうかと土地の人が言うのを耳にし、藁をも掴むという感じで、すぐに所縁の地の磻溪はんけいに向かいました。

太公望という釣り師の代名詞のようになっていますが、元来は呂尚ろしやうという人の称号です。呂尚しゅうは周の文王ぶんおうと、その息子の武王ぶおうに軍師として仕えた人です。ちよつと脇道にそれますが、孔子こうしが特に理想の人物と考えたのは、古代の聖天子である堯ぎょうと舜しゆん、周王朝の創始者である文王と武王、そして武王の弟の周公旦しゅうこうたんでし

た。

いまから3000年ほど昔の殷王朝いんの終わりに紂王ちゆうおうという史上名高い暴君がいました。そのとき太公たいこうという高い位にあつた文王は、紂王の暴政に苦しむ民衆に心を痛め、紂王に殺されそうになりながらも、自分の領地では民衆をいたわる政治を行っていました。あるとき狩りに出て、自分を補佐してくれる人物に出会うとの占いを得て、黄河の支流の渭水いすいに注ぐ磻溪に行きました。その場面を、日本の古典である『太平記』は次のように叙述しています。

潔斎たもし給う事七日、渭水の陽きたに出でて見給うに、太公望が、半蓑はんさの煙雨水すさ冷じゅうして釣りを垂るる事、人にかわれるあり。

煙のような雨を蓑に受けて釣りをしていたのが呂尚で、これぞ自分が求める人物だと知りました。太公が待ち望んでいたのが太公望というわけです。文王は太公望を得て、自領の民を豊かにして力を貯え、その子の武王の代に、やはり太公望の助言を得て殷王朝を滅ぼして周王朝を興したのです。そのような太公望はいつしか神として崇められ、釣りをしていたとされる磻溪の岩場は現在でも名高い観光スポットになっています。

夢に驚き、枕から頭を上げると、いまはすでに真夜中であろうか、
人気がない寺に、ともしびが消えかかっている。

風の音が、深い谷間に、ざわざわとずっと響いている。

山の峰から月の光が射し込んで来て、

壁に記された詩がぼんやりと浮かび上がる。

かの人の消息を聞かないと想っていたまさにその人の姓名がある。

その詩を繰り返し吟唱する間に、

そろそろ太公望に祈りに行く刻限になったろうかと、

北斗七星の傾き具合を人に尋ねる。

これは、7月24日に礪溪の近くの寺に泊まったときの詩です。「かの人」とは趙薦ちやうせんです。五月病が悪化し、雪見に宴の出られずに伏せていた私に詩を送ってくださった人です。

北斗七星の傾き具合を答える馬正卿の声に応じて、日の出より2時間ほど前に

寺を発ちました。

山を照らす松明たいまつに驚いたのか、

猿がどさりと枝から落ちる。

細い月がぼつんと浮かぶ下を、

狭い谷へと入って行く。

川底の岩を洗う川の波が、

暁に向かつて、冷たい音を一段と強める。

太公望は遠い昔に白雲の彼方に飛び去り、

神々しい跡だけがいまここに残っている。

どうかして、太公望によって力を得て、

雷神の後ろに従って馬を天へと走らせ、

瓢ひょうを傾けて地上に大いに雨を降らせたいものだ。

一生懸命に祈りましたが、夜の明けた空には雨を降らせるような雲は一つもありませんでした。

効果なく雨乞いに虚しく日数を費やした私は、もはや木材の搬出現場に行かなければと、陽平ようへいという町に向かいました。乾き切った大地を行く足どりは重く、急ぐ気持ちに反して、とある村でひと息入れずにはいらられませんでした。

青峰寺せいほうを目指すもまだまだ着くには至らない。

渭水いすいのほとりの村にまで来て、

翠麓亭すいれきの名と小路のゆかしきにひかれる。

谷合いに朱の欄干がくっきりと映え、

まわりの山を越えて古い木が高くそびえる。

小路は岩の崖に突き当たり、

そこで林が切れ、下に河の流れを見る。

疲れた馬は青い草をほしがって鳴き、

翠麓亭を守る僧が「ここで休まれよ」と言ってくれる。

私が来たのは秋の昼さがり、

日照り続きであるから、石の台がことのほか熱くなっている。

どうかして、空を覆う傘のような雲を得て、

盆をひっくり返す雨を降らせることができなだらうか。

山のふもとに広がる田圃の稲が、

濡れた葉をいかにも涼しげにひるがえす夕べの景色を、

ここで見たいものだ。

それからは、各地で木材の搬出を監督する日程をひと通りこなし、鳳翔府にいったん帰りました。陳知事からは顔を見せるなど言われていたので、中間報告を記して提出し、再び現場へと出ますと、実に不可解なことに、鳳翔府から早馬が来て、私を罰する陳知事の命令書を手交されました。罰として銅八斤を払えとそこにありました。

——なんか悪いことをしたの？ 銅八斤っていうのは重い罰なの？ 価値がわか

らないけど、銅のケーブルが盗まれたとかたまたまにニュースになったりするから、それなりに高価なのかなあ。

ⓧ 罰としては軽いものではありませんが、もちろん名誉なことではありません。何の罪かというところ、知事が主催する8月15日の中元節の行事に無断で欠席したというものでした。中秋の名月を愛でるその行事は公的なもので、その日はたまたま官舎に帰っていましたから出ることもできたのですが、知事から出席せよとの指令はなく、顔を見せるなど言われていながら勝手にこのこ出るのもまずかろうと、部屋に籠っていたのです。

——やっぱクラッシュヤー上司ってことか。なにがなんでも潰してやろうってこと

なんだろうね。

㊦ こんなことで争うのも馬鹿馬鹿しいと、甘んじて処分を受けました。このことをきつかけに、陳知事と私の間がよろしくないということが都にまで伝わり、弟から心配する手紙が届きました。実にくだらないことが世間に知れ渡ったのが、恥ずかしくも腹立たしく、秋の名月にちなんで次のような詩を詠みました。

雲は佳よい月を妬んで猛り狂い、

飛んで飛んで千里の彼方まで空を真黒にしようとする。

佳い月は怒りはしない。

月の白さそのものが汚されることは決してないからだ。

昔、李白りはくが仙界から人間界に降ろされたときに、

月と自分と我が影と三人が友だと言った。

今夜は黒い雲のせいで月が見えず、影もない。

その寂しさに、風の神が来てくれないか思う。

しかし、変わりやすい風の神などあてにしない方がいいだろう。

頬杖をついてしばらく待ってさえいれば、

空にはいずれ何もいなくなり、

黄金の丸い盤さんばんが燦々と輝き出し、

その光が青い天空の隅々までも満たすだろう。

星はそのために輝きを失い、

夜露は洗いたての秋の色を宿すであろう。

月がガラスの玉のような光のかけらをぼろりと落とせば、それは我が胸の内へと入って来る。

永遠にかげることなき光を得て、

私は月の友となるのだ。

——ふーん、黒い雲がクラッシャー知事ってことだよね。ちよつと露骨な感じのする詩だけど、どこかジョン・クレアっぽいところもあったりするのかな。そう言えば、最初のころに、亡くなったお姉さんが月の光を拾って帰ろうとしたって言うってんだけど、それと通じるところがたぶんあるよね。

それで、いまね、ジョン・クレアのこんな詩を思い出したんだけど、これはあんまし関係がないかな？

小さな花々、そして野に飛ぶ鳥たちの歌、

ぼくはそれらも遠くに残して去るだろう、

他所よそのくにで、他所よそのことばを話しつつ、

彷徨さまよう孤独な うた人となって。

他所よそのくにでも、ぼくは君を想うだろう、

人の世の恋なんかに、執着はしないだろう、

北極星がぼくの恋の宮殿になるだろう、

そこなら、何もそのまま、変わらないはずだから。

(森松健介訳、336ページ)

これは、ジョン・クレアが精神病院に入っていた、本当に晩年の詩なんだ。なん
でこれを思い出したんだろう？ 無理にこじつけると、ジョン・クレアは永遠性
を北極星に見ている、トバー君は月に見ていたってことなのかなあ。

㊦ 世間から隔絶されたこのときのジョン・クレアの苦しみに比べたら、私の腹
立たしさなどたわいもないもので、いまの私の詩はおっしゃる通り露骨で、卑俗
で、陳腐で、うさばらしにこのような詩を作っても意味がないと我ながら呆れ返
りました。

雨がなかったために、危惧していた通り、場所によって木材の搬出作業は非常に困
難になりました。水で流すことができなければ人の力で曳かなければなりません。
人々が苦しみあえぐありさまを目の当たりにし、私は心穏やかならざるものがあ

りました。朝廷の命令とはいえ、現場で一番の上位者は私でありますから、そこで民衆を苦しめているのはほかならぬ私なのです。せめてできることと言えば、

労働する民衆に食物と休養をそれなりにきちんと与えるよう努めるくらいでした。

雨が降ればその状況も好転します。天に繰り返して祈りました。祈っても祈っても雨は降らず、私の祈り方が悪いのではないか、信じてもらえないのに祈るのが悪いのではないか、そもそも天が私を認めてくれないのではないかと、いろいろと我が身を責めないわけにはいきませんでした。

陳知事に対する反発心からでしょう、5月病はいつしか治っていたのですが、我が心はまた別の重圧を受けて辛いことになりました。

——トバー君って、けっこう繊細なところがあるよね。そうでなかったら、詩

とか作らないだろうしね。

① 私は再び心身症に陥りかねない危うさを感じ、しばし現場を離れて道教の寺院に籠る時間をひねり出しました。

——ああ、そういうのって大事なんだよね。プレッシャーにあんまりさらされ続けると、それが当たり前になって、自分が壊れそうになっていることにも気付けなくなっちゃうからね。ボクも、2度目か3度目の職場で、頑張りすぎちゃったことがあったもの。今度はもう辞められないぞって思いも強かったから、とにかく働きづめになっちゃったんだ。いまのボクからは想像できないだろうけどね。「カッコ笑い」ってことで。



道教の寺院に行く予定を手紙に書いて弟に送ると、すぐに詩が送られて来て、それに和したのが次の詩です。

外なる名に使われると、ただただ役目を勤めねばならず、

内なる身に任せると、ただただ安楽を偷ぬすんでしまう。

まことに愚かで拙い私は、

名と身の二つをとにもうまくやりくりすることができない。

いまさらのように私は、官員としての口の利き方、

公文書の書き方を学ばなければならなかった。

ここにきてようやく罪人の訊問の仕方を会得したばかりだ。

官員というものは、

いま何をすべきか知ろうとしたら、

何はともあれ先例を調べなければならぬ。

官員というものは、

望む地位を得られずにいる間は、得られないことをひたすら憂い、
得られたら得られたで、それを失うことをひたすら憂う。

だからその心は決して落ち着くときがない。

疲れた旅人が道の途中で清らかな流れに出合い、

しばし休んで水を掬って飲んでも飽き足らず、

塵にまみれたまままた道を進まなければならぬのと同じである。

私は、春の鳥のさえずりを聞いたところに、

自然の内へと入ってみたいと思った。

あれこれ決めかねているうちにいまはもう秋の終わりだ。

御陵造営の期限が迫り来て、府県の役人は仕事の手配に忙しい。

国家の事業であるから不平を言うべきではないけれど、

民衆を煩わせることに恥じらいを覚えないわけにはいかない。

しかも、いまは日照りの嘆きがある。

私は何よりも雨を呼ぶ術を学ばないといけない。

川の水は涸れ果て、川底の泥まで乾いてしまった。

一本の木を千人がかりで曳かなければならない。

人々は十歩進むために八回も九回も息継ぎをする。

こうしたことを見ていると、食事さえ欲しくなくなる。

何かをする気力の一切が失せてしまう。

もしも秋の雨が十分に降ってくれたならば、

公務の合間に新酒を味わうこともできようかと想像はするのだが、

いまの骨折りが幸いにも終わったとしても、

朽ちた自分にはもはや任務に耐えられなくなってしまっていることだろう。

だから、秋の風が私を丘へと誘い出し、

せめて一日の楽しみだけでも得て、

百日の愁いを慰めようと思うのである。

私が選んだのは太平宮たいへいきゆうという寺院で、いよいよそこに向う前の夜にも詩を作つて弟に送りました。

人生はたかだか百年、

髭や髪が白くなるだけの時間しかない。

富貴なんぞは葦の若い茎の中の薄皮ほどのものでしかない。

墨をしたたらせて詩文を書くなどという行為は、

酔いつぶれてきれいなお姐さんに介抱されるよりは、

いくらか体裁がいいだけのことだ。

こここのところ私は学問をやめてしまったので、

しばらく吹かずにいた笛が詰まって音が出ないようなありさまだ。

今年も残すところ少なくなり、

秋の風がもたらす水のような涼気が身に沁み入る。

明日は南の川に行つて鳥や獣を友としようと思つている。

寢床で落ち着かぬまま夜明けを待つている。

昔むかし、一生涯ただ筆だけを弄んで、

鳥のように全身真黒になりたいと願つた人がいた。

私もまったく同じことをいま思つている。

門を閉ざして一日中僧侶のように座り続け、

官爵などは泥のように見下すのだ。

私はどうしてこうもぐずぐずしているのだろう。

歲月は自分と一緒にぐずぐず留まっていはいはくれない。

もう夜が明けるのか。

私の馬に秣が与えられようとしている。

馬正卿が秣を与えてくれた馬にまたがり、太平宮に向かいました。

じようせいたいへいきゆう

たいせう

太平宮は正しくは上清太平宮といい、宋の二代皇帝である太宗によって建てられました。太宗皇帝は太白山の近くに道教の寺院を建てようと思い立ち、人を派遣して場所を選ばせたところ、道教の最高神である真君しんくんが降りて来て「ここにせよ」と示したと言われています。3年をかけて建設され、道教の経典である道蔵だうざうが一式納められました。太平宮に行く目的の一つはその道蔵を見ることでした。

どのような幸いに恵まれたのか、

この道教の寺にたまたま来ることになった。

何がここにあるかというと、

千の箱にぎっしりと書物が詰められている。

赤い錦の囊ふくろに納められ、

青い霞の裾のような紙でくるまれ、

仙人が箱に鍵を掛け、

神がその部屋を守っている。

神の隙を窺って書物を覗こうというのだから、

ゆっくり眺める時間はない。

それでも、真理を知る人は一言で悟れると言うし、

道は静かな心に集まるとも言うから、

心を長閑にして蓮のつぼみを想い見るならば、

おのずと純白の大輪を咲かすこともあるだろう。

かくて俗世を離れて千年の彼方に去れたならば、

その後^{しかばね}に遺した我が屍^{むしろ}を包む蓆に、

我がこの詩がなるであらう。

人はかりそめの身をいい加減に扱って、

土くれ、草きれで養おうとしている。

私は道教の真理を得て我が憂いを除きたいと思っている。

それさえできなくて、

天下を治めることにどうして関わろうなどとしているのだろうか。

——うーんと、よくわからないところもあるけど、要するにエリート官僚はつらいよってことが根っこにあるのかな。自分1人の心を安定させることもできない

のに、どうして天下を安定させるような仕事ができるのだからと、そういう悩みかな。難しい試験に合格したばかりに、大変なことになっちゃったんだ。ご苦労さんですよ。

① 限られた時間に急いで道教の経典を読んで、すぐに真理を得て、たちまち自分が変わるということは勿論ないのですが、それなりにリフレッシュすることができました。

仕事に戻り、木材の搬出を期限内に終えられる見通しが立ち、それはそれでほっとしたのですが、依然としてこれといった雨はなく、秋の収穫はすでに終わってはいても、どこの村も秋祭りの賑わいはありませんでした。

私にはわかには危機感に駆られ、鳳翔府に帰って、迫り来るであろう飢饉に対処

する緊急の方策を取りまとめ、陳知事に提出しました。

「神はまだ雨を降らせてはくれぬのだが」

と嫌味を言いつつも目通りを許され、私が差し出した書類をちらりと眺めると、

「そなたは備蓄庫に行ったと、この前言っておった。そこはいかなる臭いであったか」

思いもしない問いに、臭いは特に気に留めなかったと答えるしかありませんでした。

陳知事は一枚の紙を取り出し、

「これを持って各部署を回って来い。この件に関してそなたのやるべきことはそれだけだ」

飢饉に対処する方策が箇条書きにされていました。基本的には私の案と同様で

したが、それぞれの部署への指示が具体的に記されていません。

「これがあるのでしたら、いま私にご指示くださる前になさらなかったのでしょうか。民のためには一日でも早い方がよいではありませんか」

「一日でも早いのがよいに決まっている。これは昨夜遅くに書いた。だからこれが最速だ。余計な口をきく前に、そなたの鼻を何とかするがいい。備蓄庫を管理する者は、物の出入りを一合一勺の単位まで正確に帳簿に記す。それが正しいかどうかを確かめようとするわれわれの目をごまかすのは造作もないことだ。備蓄庫の臭気はどこにも記録されない。われわれの鼻をごまかすことはできない。たとえ数字通りに物が存在していても、腐っていたのではないのと同じだ。いざ飢饉になって備蓄を放出し、民衆が受け取るのが腐つてとても口にできない物だったらどうなるか。飢えた民衆の怒り以上に恐ろしいものはない。飢饉があらわに

なる前の早い段階から備蓄を適宜放出して、穀物が高騰するのを防ぐべきだとそなたは言う。試験の答案ならそれで通用するだろう。ここ鳳翔府ではそれでは何ら役に立たない。備蓄庫の管理者は数字合わせをするだけだ。良い物を選んで懇意の商人に安く払い下げ、商人は値が上がるまで売り控え、結局は商人が法外な利を得て、その分け前を管理者が得るということにならぬとも限らない。制科に合格したそなたに向かつて、このようなことまで説明せねばならぬとは、全くもってどうにもならん。もう行くがいい」

——ふーん、どうやら、行政官としての実力はクラッシャー上司の方が上だってことみたいだね。問題の所在はわかっても、実行する段階ではまだまだだったんだね。

これも叔父さんから聞いた話なんだけど、会社なんかで新しいことをしようとしたときに、初期段階でT大卒の人に検討させると、本質的な欠陥を次々に指摘して、たちまちつぶされてしまっただって。W大卒の人に検討させると、あれもあるかも、これもあるかもと、アイデアがどんどんふくらむんだって。ほとんどはくだらないことだらけなんだけど、とにかくめいっばいふくらんだところでK大卒の人に検討させると、実現可能なものをスマートに選び出すんだって。その上で、T大卒の人に検討させると、欠陥を補って最終的に実行できるようになるんだって。出身大学でそんなふうの違いがあるとは思えないけど、何かをすることにいろいろんな段階があって、人によって得意不得意があるってことなんだろうね。トバー君は頭がよすぎて、本質がすぐに見えちゃって、それでもうOKみたいところがあるんだろうね。

㊦ あなたから何回か理系的だと言われました。本質を見抜くことが最も重要で、試験の答案としてはまさにそれでよかったです。それだけは問題は解決しないということくらいは私だってわかっていました。わかっているだけでも、具体的な進め方を詰めて考えるというあたりが欠落しがちだったのです。

その点で陳知事は私を遙かに上回っていました。しかし、陳知事に全面的に承服したわけではありませんでした。陳知事は備蓄庫の管理者をまるで信用していないような言い方をしました。陳知事は人を厳しく管理し、時に重い罰を与えて、意のままに操ろうとしていました。陳知事のその手法は優れて実践的であったのでしょうか、私は是認することができませんでした。私はあくまでも人を信用する側に立っていたと思いますのです。

私はいわば仕事を干されたようなことになり、暇が多くありましたので、陳知事がとくに信用していないと見える官員や吏人とあえて親しくしてみるようなことをしました。その者たちだつて実は信頼に値するのだと、陳知事に見せ付けてやりたいと思つたのです。

——意地の張り合いつてところかな。たとえていうと、親に「あそこんちのワルガキとは付き合つちやダメ！」つていわれて、わざともつと仲良くしてみせるくそガキみたいなことをしたつてことかな。トバー君もまだまだ若かつたんだねえ。えーと、こんときは28歳だつて？　ボクと比べちや悪いけど、いまのボクよりも下だつたんだから、すねたり、あばれたり、いろいろあつてもいいお年頃だよ。

㊦ そのような振る舞いをする私を見て、ますます顔を曇らせたのが我が妻でした。ご指摘の通り「くそガキ」みたいなことをしていると、私も自覚がなかったわけではないので、ある日のこと、誰が本当の「わるガキ」であると思うかと、単刀直入に妻に尋ねてみました。

この前は妻はうなだれて何も言わなかったのですが、このときも困ったような顔でしばし返事をためらって、

「わたくしが好きか嫌いかの印象でものを言っていると、あなたさまがお受け取りになって、かえってよろしくないことになってしまふのを恐れます」

と、立ち去ろうとするのを呼び止め、どうにかして妻から聞き出そうと、一つの提案をしました。印象ではなくて具体的な事実に基づいての評価であることが明

瞭になるよう、私が実際に人々と話をしていく様子を聞いて、その上でものを言
つてほしいと頼みました。同席するのではなくても、執務室の壁のすぐ裏に潜ん
で耳に澄ませれば、およその会話を聞き取ることができます。固辞する妻に無理
やり頼み込み、壁の後ろに半日してもらいました。

——つまり盗聴を頼んだってことか。おもしろいかも。そんなもつて、だれがろ
くでもない「わるガキ」なのか、奥さんに教えてもらえた？

㊦ 妻はあくまでも慎重でした。

「二度だけのことで軽々には申せません。私が聞き耳を立てていることをあなた
さまは意識なさっています。本当のことがわかるのはそれが消えてからではない

でしょうか」

そう言われてみると、妻が壁の向こう側にいることを意識して、私はいつもとはいくらか違っていたのでしよう。

それから2、3日は同じようにしてもらい、馬正卿と外に出た折に、

「昔、堂々の宰相に名を連ねても、恐妻家と言われた人はいた。誰それと付き合つてはならぬと、妻に決めてもらう夫というのはどういうものだろうか。私も妙なことになったものだな」

自嘲気味に言いますと、

「若旦那様が初めての例になるのならまこと栄誉ではないでしょうか。万人にそれぞれ優れたところがあるとするのが若旦那様のご信条でありましょう。人が寄り集まって生きるのはそれぞれの優れたところを相補うためでありましょう。ご

夫婦もそうなのではありませんか。お見受けするところ、美々しく飾られた装いの下に何が隠されているかを見抜くことでは若旦那様は奥様に及ばず、美々しく飾られた装いの上にさらなる美しさを想い見ることでは奥様は若旦那様に及びません。相補うのにこれほどよろしい関係はなからうかと思えます」

——なんか似たような言い回しを前にも聞いたような気がするなあ。忘れちゃったけど。トバー君はやっぱだまされやすいってことだね。

㊦ 9月半ば、私は数日の休暇を頂戴しました。陳知事との関係はぎくしゃくしたままで、やるべき仕事はあまりなく、長らく外に出ていたこともあつて、休暇は簡単に許されました。家族を連れて鳳翔府から離れ、天和寺てんなじという仏教のお寺

を訪ねました。

遠くから見たとき、

朱色の欄干や青い瓦が山に映え、

なかなか愛すべき景色であると感じた。

近づこうとすると、

一步登るごとに足を止めて息を継がねばならず、

百回以上も寺を見上げることになった。

川の底には水がなくて石が現れ、

野の上には塵が上がって遠くの町の楼閣は見えない。

風に臨んで声を出すのはよそう。

我が思いのほどを抑えられなくなってしまいうだらうから。

——「思いのほど」ってなに？ それを説明したら、詩がだいなしになっちゃうかな。川に水がなくて、野に塵が上がるといいうのは、雨がずっと降っていないからだよ。そういうことがやっぱ気になるんだね。

㊦ その日はすぐ近くの扶風ふふうという町の駅館に泊まりました。駅館というのは幹線の要所に設けられた公設の宿泊場所で、主として官員が利用し、外国からの使者や科挙の受験生も泊まることができました。

私は父に連れられて科挙を受けるために初めて都に上ったときに、扶風で駅館に泊まろうとしました。宿泊を許されたのはよかったです、実際に駅館に入

つてみて驚きました。老朽化が激しく、ぼろぼろでとても泊まれるようなところではなかったのです。やむをえず民間の宿を探して一泊したのですが、それから6年を経て、囚人の減刑のために6県を回ったときに扶風の駅館に泊まって驚きました。かつてとはまるで違って、瀟洒ですこぶる機能的な宿泊施設になっていました。聞けば、先の宋知事が鳳翔に赴任してすぐに各地を巡り、ここの駅館が使用に耐えないのを見て、大々的に改修するよう指示したのです。私は、宋知事のその行為を称える一篇の文章を記しました。

新しい木の香りがまだする駅館に入り、ちょうどよい折と思い、他の者を遠ざけて、壁の向こう側で聞いた結果はどうであろうかと妻に尋ねました。

妻は、休暇中にそのような話はしない方がいいのではと言いましたが、私はあくまでも強く求めますと、

「それでは、あなたさまからお名前を挙げていただければ、今日までに感じたことを少しばかり申し上げさせていただきます」

私は、妻がたぶん最も気にしているだろうと感じていたある吏人を最初に挙げました。吏人としてはよく書物を読み、なかなか気が合うところがあると日頃思っていた者です。

妻は嘆息し、

「あなたさまはそのお方といつも楽しみに話しておられます。壁越しによく響くあなたさまのお声を聞いていますと、あなたさまがひとりだけでお話されているかのようです。そのお方も声を発してはいるのでしようけれど、ご自分からは何も話していません。あなたさまはお気づきではないようですが、実際のところそういうのです。そのお方はただあなたさまに合わせているだけです。試しに、あな

たさまがお心に思うのと正反対のことを口にしようとなされればおわかりになりましょう。そのお方はあなたさまより先んじてそれを言うでありませんよう」

私はいささかむつとして、「そのようなことはない」と否定しかけました。妻がようやく話してくれたのを止めるようなことをしてはいけないと思い留まり、別の人物について尋ねました。妻は、ある者は私から何か引き出せるものがないかとそればかりを考えていると言い、またある者は何らかの騒動が起こるのをただ楽しみにしているだけだと言い、またある者は自分に目をかけてもらおうと醜いまでに卑屈になっていると言いました。妻はいったん口を開くや、次々に辛辣な評を並べましたので、私はむつとするのを通り越して呆然としてしまいました。

——それって、奥さんは現実をちゃんと見ていて、トバー君はそうではなかつ

たつてことなのかな。話がゼンゼン飛ぶかもしれないけど、ボクって、動物の図鑑をずっと見てるような子だったって話したことあるよね。本の中にぐうっと入り込んでしまっただよね。現実よりも、そっちの方がずっと実在感があるような感覚で、現実に戻ったときに、「あれっ、これってどっちなんだろう」って、ぼんやりしてしまったりしたんだ。いまでもなんか変わらなかつたりするかも。

㊦ そのとき馬正卿が戸の外より、

「駅館の門に1人の受験生が立ち、今夜の宿を求めています。駅館の役人は、今夜は空きがないと断ったのですが、物置の片隅でも構わないと、帰らずにいます。いかがでしたでしょうか」

「困っておられるのだろう。どこか部屋を一つ空けて泊まっていたたくようにし

よう」

駅館の役人を呼ぶと、渋い顔で、

「駅館なら無料で泊まれると、受験生を偽るのでありましょう。何しろひどい身
なりの者で、下手に情けをかけて、夜中に盗みでも働かれたらたまったものでは
ありません」

「偽者かどうかは、見ればわかるう」

ちようど妻と話していたこともあって、自分にも人を見抜く眼力があるのをこ
こで示しておきたいとの気持ちが湧き、その者を呼び入れました。

おずおずと入って来た男は、人が身に付けていれば着物のように見えても、脱
いでしまえばただのぼろ布というようなく粗末なものをまとい、かなりやつれ、
一見すると初老のようで、よく見ると40歳前後のようでした。科挙の受験生で

あるかどうかは学問について一つ二つ問えばほぼわかります。

自分が蘇軾という名の鳳翔府の官員であることを告げてから、男の名を問いました。男はいたく動揺した様子で私に目を向け、一瞬、目が合うとにわかに関をゆがめ、がっくりと床に崩れ、身をふるわせて泣き始めました。同情をひくための演技ということもあるかと思っておりますと、身を伏せたまま、

「まさか、まさか、あなたさまの前にこのような姿をさらすとは、ただただ恥じ入るばかりにございます。そもそも土台無理なことと、初めからあきらめていればよろしかったのです。父の喪を終え、天地間に我が身一つとなり、家名を挙げらるには科擧に合格するよりないと、故郷を後にしました。そのとき心の内では、同じく蜀人であるあなたさまのようになりたいと切に願い、あるいはなれるのではないかと秘かに思っておりました。ああ、はなはだしい思い上がりでありまし

た

男の嘆きを黙って聞いていますと、楊耆ようきと名乗り、

「蜀を出てここで早くも旅銀が尽き、身は旅に疲れ果ててしまいました。このよ
うな身なりでは人々に侮蔑され、都にたどり着けるあてはなく、かといって郷里
に帰ることもできず、野に伏して死ぬしかあるまいと思いつつも、夜になればい
まひと晩は屋根のあるところだと、ここの門を叩いたのでございます。まさか、
心に思つて来たあなたさまの前にこの身を置くことになるとは。あなたさまはひ
とたび翼を翻せば九万里の高さを飛翔する鵬おおとりのようなお方。それを見上げて羨
む雀ならまだしも、あたかも自分も同じようにできると夢想してしまうのですか
ら、愚の骨頂にございます。あなたさまは天下のために働かれるお方、私はただ
己の苦境から脱するために科擧に合格したいと願う者でございます。あなたさま

とはとても同じ屋根の下には身を置けません。ご無礼いたしました。これにて失礼させていただきます」

楊耆は立ち上がり、ふらふらと去ろうとするのを止め、

「蜀の人とあれば、成都せいとに行かれたことがありませんか」

成都は蜀の第一の都市です。

何度か行ったとの答えに、

「では浣花溪かんかけいは訪ねられましたか」

浣花溪は成都の西南を流れる川で、そのほとりに草堂を建てて杜甫とほが一時期住んでいたことで知られ、現在はその地に成都草堂博物館があつて有名な観光スポットになっています。

楊耆は杜甫の故地を歩いたと言うので、

「では、八月の大風で草堂の屋根が飛ばされてしまったときの詩はご存知でありますか。それをここで聞かせただけでないでしょうか」

楊耆はとまどいの表情を浮かべ、しばし思案して、得心したように一つうなずくと、

「身の疲れに声がかすれておりますが、ご所望とあれば唱えさせていただきます」

天高き八月の秋、

びゅうと風が怒ったかと思うと、

我が屋根に三重に葺いた茅が巻き上げられてしまった。

茅は飛んで川を渡り、ばらばらと向こうの岸边に降り注いだ。

林の梢にひっかかったものもあれば、

小池に転がり込んで沈んだものもあった。

村の子どもたちがわっと出て来て、

どうせ老いぼれの私には力がないだろうとあなどり、

私より先を走って、これ見よがしに盗みを働き、

茅を抱えて竹林の中へと逃げ去って行った。

喉がからからに、唇が焦げるばかりに叫んだけれど、

子どもたちにはかなわなかった。

茅を失った草堂に帰り、

杖にすがって溜め息をついた。

風はじきに止んだが、雲は墨を流したような色で、

夜に向かって空は真黒になった。

長年使い古した布団は鉄のように冷たく、

その上、息子どもの寝相が悪くて裏があちこち裂けてしまっている。

とうとう雨が落ちて来た。

屋根は漏り放題だから、

寢床のまわりはどこもかしこも濡れ、

いつまでも雨は止まない。

世の中が乱れてから安心して眠れたことがないのに、

この秋の夜長をどうやって明かしたらいいのか。

そのとき私は夢想する。

千本、万本の柱に載る大屋根がここに現れ出て、

天下の貧者が皆その下に集まり、

「喜び合う顔を互いに見るのだ。

どのような風雨にも動かざること山のごとき大屋根だ。

いつしかそびえるその屋根を目の前にできるのなら、

我が庵が壊れ、私が凍死したところで構いはしない。

吟唱しつつ、楊耆は涙をぼろぼろとこぼしました。私は偽りをする者ではないかと疑ったのを悔やみました。

「かつてこのようなことを聞きました。女には美しいも醜いもなく、富める娘があでやかに見えるのだと。こころも聞きました。男には賢いも不肖もなく、貧乏な者がうだつがあがらなく見えるのだと。人は外見に惑わされます。屋根が飛ばされたときの杜甫は、村の悪童どもからも小馬鹿にされました。いま我が宋代の

士大夫したいふで杜甫の詩を学ばぬ者は誰もいません。

千本、万本の柱に載る大屋根は平和な世の象徴でありましょう。杜甫は当時の朝廷に絶望して官職を棄てて放浪し、成都の浣花溪に至りました。私はお上の事に携わりながら、日々の雑事に汲々とするばかりで、まさしく杜甫を絶望させる者でありましょう。身の置き所なく恥じねばならぬのは私の方であります。時運に逢いさえすれば、貴殿こそが千本、万本の柱に載る大屋根を築く大事業の指揮を執るようになるではありませんよう。

今夜はどうかここにお泊り下さい。たまたま私は官職に就いていることから、貴殿に一晚に宿をお貸しすることができるのを、高みより施しをすると貴殿の眼に映りましたら、どうか蔑んでいただきたい。今夜は貴殿に教えを乞うて杜甫の詩を学び直し、我が身を新たにしたいと思えます」

楊耆の前に頭を下げると、ぱらぱらと屋根を打つ音が聞こえて来ました。初めは疑いましたが、確かに雨の音でした。

私は外に飛び出し、夜空より落ち来る雨粒を手に受けました。その冷たい感触に身が震えました。望んで久しい雨がこのときに降り出したのは、あるいは天意の現れではなからうかと私は感じました。

その夜は、馬正卿も交えて3人で杜甫の詩を語り合いました。楊耆と馬正卿がそれぞれに深く杜甫を理解していることに感銘を受け、「我が身を新たにしたい」と言ったことは必ず実行しなければならぬと、降り続く雨に対して誓ったのでした。

———そういえば、孔子と杜甫と陶淵明とうえんめいを特に尊敬するって前に言ってたよね。だ

から杜甫について語り出したらきつと長くなるだろうからあえて聞かないけど、深く思うことがあったんだろうね。

㊦ 杜甫は純粋な人でした。それに比べて私は何だというのでしょうか。制科に合格した後、宋朝の皇帝を古代の聖天子の堯や舜のようにすることも可能だと考えました。途方もない望みを抱きながら、一体何をしたというのでしょうか。

翌朝、雨は上がり、楊耆に衣類と少しばかりの餞別を与え、道を商州に取るように言い、章惇しょうとんへの手紙を授けて別れました。

私たちは鳳翔府に馬首を向け、

「雨によって野は新たな命を得たかのようにではないか。私もまた同じようになれるとよいのだか」

馬正卿にそのように言ったのですが、実際にはそれは容易なことではなく、鳳翔府に戻れば官員としての日々は以前の延長上にあり続けたのでした。妻が容赦なく批判した人々と、今後どのように接して行きたいのかということもすぐには見えて来ませんでした。

——自分を変えようと思って、すぐにその通りにできるのだったら、だれも悩んだりなんかしないよね。まして他人を変えようと思うのは絶対に不可能だよ。介護の仕事をするようになって、そういうことがよくわかったんだ。そんなの当たり前のことだけだよ。

介護施設での介護の仕事って、100パー、チームワークなんだよ。何十人か利用者さんに数人の職員で対応して、あれこれいろんなことをして、職員どう

しの連携が大切なんで、だれが何をしているのか、逆にいうと、だれが何をしていないのかがお互いにみんな見えているんだよ。そういうことばつか気にしている職員がいて、なんか監視されているようで、最初はすごくいやだった。人のミスをいちいちあげつらったり、いっつも不満をぶうぶういったり、なんでこんな職場なんだろうって思った。まあ、いろいろあつて、当たり前のことやつとわかるようになったんだ。

トバー君も、パワハラ知事の方は変わってくれたりしないから、自分が変わるしかないってことだったんだろうね。問題はそれではなかったんだろうけどさ。ちよつと見当違いのコメントだったかな？



後から振り返って、私が新たな自分になるまでに、このときから20年の歳

月を必要としました。20年後に私は罪を得て黄州こうしゅうに流され、そこに楊耆が訪ねて来ました。楊耆と何の隔たりもなく語り合えて、私は自分が変わったと実感できたのでした。

二十年の昔、

降り出した雨が秋の涼気を送って来たのは、

旅の宿の長き夜に、君が世のつれなさを嘆いたときだった。

眠れぬままに馬にまぐさを与え、

別れの歌を静かに歌うと、秋の虫が応じてくれた。

そしていま、

天候は寒く、実らなかった穂が畦に横たわり、

年が暮れようとするのに、機織りはむなしく壁に立てかけたままだ。

君にもう一杯の酒を勧めよう。

しばしここで眠ろうではないか。

人間界の貧富など大海の波のようにあてどないものなのだから。

楊耆はとうとう科挙に合格できず、20年後も依然としてごくみずぼらしいな
りをしていました。そうでありながら、遠く旅をし、蜀の名産を携えて持って来
てくれたのです。

——20年経ったということは、その人はもう60歳くらい？ 結局、志は果た
せなかったんだ。「実らなかつた穂」っていうのはその人のこと？ 罪を得たトー

バー君のことでもあるのかな。

詩の解釈はいろいろあっていいということにして、ちよつと気になってんのは、
駅館でトーバー君は奥さんからアドバイスを得たわけだけど、逆はなかったの？
ほら、奥さんも新しい土地にきて、家のこととか子どものこととか、悩みを抱えて
いたりしなかったの？ それを聞いてあげたりしなかったの？

㊦ そのように問われると、私が古臭い「封建男子」であるということをもう一度
度思い出していただきたいと申し上げるよりありません。馬正卿に初めての例だ
と言われたのが、せめてもの褒め言葉であったでしょう。要するに家庭を顧み
ない夫であったのです。我が父は放浪に旅に出て、時折しか帰ってきませんでし
た。私も本当はそうしたかったのかも知れませんが。

——たしか結婚したくないって逃げていたんだよね。そういえば、息子さんの話もゼンゼンないけど。

㊦ このころに息子とどのように接していたのか、記憶がほとんどありません。5月病になったくらいですから、たぶん自分のことだけで精一杯だったのでしょう。

——その時代の人って、みんなそんな感じだったのかなあ。梅堯臣ばいぎようしんって言ったつけ、奥さんに恋の歌のような詩を送ったという話は聞いたけど。

㊦

梅堯臣は子を詠んだ詩もありました。一つだけ聞いていただきましょうか。このとき息子は15、6歳だったのでしょうか、この2年前にその母が亡くなっています。

我が子は頼るべき人を失ってから、

髪は束ねるだけで減多に櫛を入れないし、

風呂もろくに入れてもらえないから、

虱しらみがたくさんわいてしまった。

ぼろぼろの綿入れでは棲みにくいと虱も思ったか、

黒く変色したのが頭に這い出て来た。

蟻がぞろぞろうごめいているかのようにであり、

蚕が卵からかえってもぞもぞ群がっているかのようなでもある。

かゆくて搔くから、

ぼうぼうに伸びた草がぐしゃぐしゃになって頭に乘っているようなありさまだ。

陶淵明の子のように、せめて梨や栗くらいはほしがってくれていいのだが、

そのゆとりすらもない、

髪を刈ってしまうのは難しいことではないのだが、

我が子が母から受けたものを損なってしまうたくはない。

陶淵明が出て来たのは、陶淵明に子を詠んだ有名な詩があるからです。

さて、鳳翔において、私は自分が変われないもどかしさに苦しみつつ、気分がくさくさすると、馬正卿を連れて町の外に飛び出し、野に馬を走らせ、あちこち

郊外の寺院を訪ねました。前に鳳翔に来てすぐに画を觀た詩を聞いていただきましたが、このころは寺に所蔵されている画を見るのが、私にとってとくに大きな楽しみとなっていました。画の前に身を置くと、時に言葉で言われるよりも心に強く響くものがあります。画を見ることで、私の心のありようが少しずつ変化して行つたように思います。

——画でも音楽でも、直接なにかがあるってわけじゃないんだけど、なんかそういうことってあるよね。ボクにとって大きかったのは、トバー君も知つての通り、サーフィンだね。サーフィンやったからといって、介護の仕事がじょうずになつたりしないし、人との付き合い方がうまくなつたりしないんだけど、ボクは明らかに変わったと思うんだ。

㊦ ある日のこと、開元寺かいげんで壁画を見て帰りかけると、門のところところに老いた2人の僧が待ち受けていて、

「どうか愚僧どもの小院に御足労願えませんかでしょうか」

言われるままに後に従うと、木立の奥に古びた小さな庵があり、

「愚僧どもはここで長年にわたって薬術の研究を続けてまいりました。2人ともかように古い、愚僧どもの薬方が廃れてしまうのを恐れ、しかるべき人を見つけでは伝授いたしております。いま最後に一つの薬方だけが残り、しばしばお越しになるあなたさまのお姿を拝見し、この薬方を伝えられるのはあなたさましかいないと確信しました。ここに薬方を記してあります。どうかこれをお受け取りください。そうしていただければ、俗世の妄執から愚僧どもはすっかり解き放たれ、

弥陀の世界へと参ることができるのでございます」

袋の内に納められた書物を前に出され、

「かつて私は山の奥に棲む隠者を訪ね、薬の作り方を教わったことがあります。以来、薬方に興味を抱き、書物を手にして試してみたこともあります。これはいかなるお薬でありましょうか」

「砂を金に変える方にございます。有用な薬方であるだけに世を乱してしまうのを恐れます」

「昔から多くの人がそのような方法を得ようとし、しかし、大層難しく、成功した者はほとんどいないと聞きます。私はそれをあえて好む者ではありません」

「邪よこしまな心の持ち主は、ここに書いてある通りにしても金は作れません。あえて好まぬあなたさまであるからこそ作ることができます。あなたさまはこれを用い

なくてもよろしいのです。あなたさまから確かな人へと伝えていただければいいのです。それで結構です」

泣いて頼むのに根負けして袋を受け取ると、2人の僧はほっとした顔で、

「実は、この薬方を教えるところあるお方から再三迫られ、困り果てておりました。

そのお方は、恐らく金を作ることはできませんでしょう。怒って、邪法を用いたと愚僧どもを殺そうとするでしょう。命を惜しみはしませんが、この薬方が消されてしまうのを惜しみます」

「私が受け取ったと、もしもそのお方が知ったならば、私を恨んだりするのでは
ありませんか」

「決して口外はいたしません」

「そのお方はどなたでありましょうか。予期せずして恨まれるようなことは避け

たいと思いますので」

「お聞きになって、その薬方をお受け取りになるのを拒むようなことはないとお約束いただけるのなら申し上げます」

それは誰だったと思いますか。

——そうやって質問するってことは、ボクにも答えられる可能性があるってことだろうから、たとえば皇帝とか？ それともパワハラ知事かな？

㊦ 陳知事でありました。陳知事自ら寺に乗り込んで、2人の老僧が薬方を抱いて山に逃げたということもあつたと言います。

——へーえ、なんかヤバそうじゃん。クラツシャー上司のほしがるものがトーバ
ー君のところどころがり込んで、もめごとのタネがまた一つ増えちゃったんだね。

① そこが意地の張り合いでしょうか、陳知事がほしがっているのなら、それこ
その他の人ではなく私が受け取るべきだと思いました。陳知事とごたごたするのは
私一人で十分です。それに、金が作れるなどというのはどうせまやかしに違いあ
りません。書いてある通りに試してみればすぐにわかります。陳知事がどうして
もほしがるのなら、金を作れもしない薬方など渡してしまえばいいのです。陳知
事も愚かなことに心を惑わせたと気づくことでしよう。

——じゃあ、試してみたんだ。

㊦ 必要な物を揃えて、実験に取り組むと、意外にも、もののみごとに金ができてしまい、その輝きに私はぞっとしました。

錬金術は西洋でもさかんに試みられ、そこから化学という学問が発展し、金は作れないと証明されたのですが、大昔のことですから、たまには摩訶不思議なこともあったと思つて聞いて下さい。

確かにこれは世を乱すものであるに違いないと、できあがつてしまった金と薬方を箱に入れ、嚴重に封をして地中深くに埋めてしまおうと考えました。

馬正卿が言うには、

「昨年の大雪のとき、あたりはどこも雪で埋まったのに、喜雨亭きうていの裏の柳の下ばかりはなぜか雪がありませんでした。物を秘すにはよろしいように思います」

それは私が心身症で伏せていたときの大雪です。パワースポットのようなところであろうかと、古い柳の木の下に2人して穴を、人の背丈近くまで掘り進んだところで何かがカチンと当たりました。

「やはりここは物を秘すべき場所であると心得た人が昔もいたのでしょうか」

馬正卿がさらに掘り進めようとする、いつの間にやら妻が来ていて、

「もしもお義母様かあさまがここにいらしたら、地下に埋もれていた物に日の光を当てようとなさったではありませんか」

そう聞いて私は愕然としました。忘れていた我が母のことを妻が思い出させてくれたのです。

どういふことかという、我が母がまだ少女であったところに、2人の小間使いが洗濯物を干そうとして、地面に足を取られてころびました。ぽっかりと穴が開

いていて、のぞくとかなり深そうでした。人々が集まり、開いた口を広げると、深さ数尺ばかりの円筒形の室むろになっていて、一番下に一つの甕かめが置かれていました。室を覆っていた板が腐り、上の土が崩れて穴が開いたのでしよう。

人々が騒ぐのを聞きつけ、我が母がやって来て、

「そこは土で埋めておしまいなさい。地中の物は地中に置くのがいいのです」

自ら土をかけ始めました。少女の決然とした振る舞いに、他の者も習い、室は埋め戻されました。その後で、そのあたりを通ると、地中からしわがれた人の声のようなものが聞こえ、掘り出されなかったのを恨んでいるのではないか、何か悪いことが起こるのではないかと言う者がいました。我が母は再び穴を開くことを許さず、結局埋もれたままで、特にこれといっておかしいことは起こりませんでした。

秘すべきものをあえて白日のもとにさらすようなことはしてはいけないという、少女であった母の訓戒に思いを致し、私は穴をもとのまま埋め戻すことにしました。そして、土をかけながら、スーパースターのはんちゆうえん范仲淹の一つのエピソードを思い出しました。

范仲淹は若いときに1人の術者と親しくしていました。その術者は病み、いよいよ死ぬというときに范仲淹を呼び、

それがし「某は水銀を白金に変える術を会得しました。我が子はまだ幼く、その術を伝授することができません。我が一代で得たこの術を滅ぼしたのでは某が生きた証が消えてしまいます。ここにその方法を記しました。どうか受け取って下さい。この術をどのように使おうとあなたの自由です」

范仲淹は辞退しましたが、術者はそのまま死に、それから十数年後に、范仲淹

は成長した術者の子にその方法を伝えました。それを記した紙はかつて術者が封をしたままの状態だったと言います。

この話を聞いたときに、怪しげな作り話であろうと思い、特に気に留めることはありませんでした。自分が実際に似たようなことを体験して、「手本は范仲淹」と言いながら、見習うべきときに見習わずに、金を作ってしまったことを大いに恥じ、そもそも薬方を受け取ったのが実にあさはかであったと、すぐに開元寺に馬を走らせ、2人の老僧に返そうとしました。しかし、方々捜しても老僧の庵を見つけることができなかつたばかりか、寺の者に尋ねても、そのような老僧は見つかることも聞いたこともないという返事しかありませんでした。

——— どういうこと？　消えてしまった？　金の製法を隠すために口裏を合わせ

た？ 初めからそんな人はいなかった？ 全部がウソっぱち？

① 真相はわからないまま、私の手元には薬方と金が残り、そうこうするうちに季節は冬になり、あるときまた馬正卿と馬を走らせ、興の趣くままに広い野に出ますと、

「あそこに走り来る馬上の人を、若旦那様はどのようにご覧になりましたか」
馬正卿に促されて遠くに目をやると、彼方に土煙が上がり、かすかに馬の響き
が聞こえて来ました。しばらくすると、近づく土煙の中から、狩の装いを凜々し
くまとった男が現れ出て、右の手は手綱を操り、左の手には弓を持ち、その後ろ
に続いて、従者と見える2人の男が同じような姿で現れ出ました。

3人3馬は、右に走っては左に転じ、真直ぐ駆けては斜めに跳び、その変幻自

在な動きにただ見惚れていますと、馬の駆け来る音に驚かされたか、草むらから一羽の鵲かたさぐさが飛び立ちました。

先頭の男が「ひゆう」と口を鳴しました。2人の従者がさつと矢をつがえ、同時にひようと放ちました。2本の矢はぴったり左右に並び、抜かれもせず、追いつかれもせず、曲がりも上がりも下がりもしないで真直ぐに飛び、鵲はすばやく身を翻し、翼を斜めにして、2本の矢の間をすりと抜け出しました。

先頭の男は大きく叫び、苛立った様子で自ら矢をつがえ、その間に、鵲は草の間に身を沈めました。男は弓を構えたまま馬を走らせ、地をほうのような羽音がしたかと思うと、ぱつと私の目の前に鵲が飛び上がりました。宙を裂いて矢が飛び来て、鳥の背から腹へと貫き通し、鵲は我が馬の蹄の先にぼとりと落ちました。

男は風のようにやって来て、ぴたりと馬を止めると、ひらりと降り立ち、両手

を前に組んで一礼し、

「その鳥を頂戴してもよろしかろうか」

堂々の偉丈夫で、声は太く、精悍な面構え、年のころは30半ばと見えました。

私も馬より降りて挨拶を返し、

「これはもとより貴殿の獲物。どうぞご随意にお持ち下さい」

「貴公に助けを求めた鳥をかように射て、さぞご不快であろう」

「たとえ鳥にそのような意図があつたとしても、私は漢代の朱家しゅかにはあらずして、まことにケチな官員のはしくれ、法にわづかでも触れるところがあれば、得たりやおうと、容赦なくしよつびく者です。貴殿がたとえ射損なつたとしても、窮鳥は懐に入れず、無慈悲に差し出したでありましょう」

私は足元の鵲を拾い、男に手渡そうとしました。

——えーと、さつきから言おうかなあって思ってたんだけど、トバー君の話の方の感じが、これまでと少し違っていない？ どっかで話術をみがいてきたりした？ ひとり芝居というか、落語か講談か、なんか演じてるような感じじゃない。それはまあいいんだけど、いまのセリフはゼンゼン意味がわからなかった。

㊦ 馬正卿に、どのように見るかと言われていたので、それを意識して「漢代の朱家」を持ち出しました。朱家とは姓が朱、名が家で、司馬遷しばせんが記した『史記』に登場する義侠の士です。男を見てすぐに連想したのが朱家だったのです。

朱家は、秦しんの始皇帝しこうていのころに魯ろの地に生まれました。魯は孔子に所縁の土地で、儒学の伝統が根付いていました。始皇帝は「焚書坑儒ふんしょこうじゆ」で知られるように、儒学

を弾圧したので、魯に人々にとって大変な危難の時代でした。朱家は任侠道に生き、役人の手から逃れるようにとする者を何百人となく救いました。貧しく身分の低い者を優先して救い、恩を施した相手とはその後にかうのを拒みませんでした。秦から漢に時代が変わって高い地位に昇った將軍とも生涯会おうとしませんでした。見返りを受けることが一切なく、朱家自身はずっと貧乏暮らしでいつもつぎはぎだらけの着物をまもっていました。

——任侠道かあ。昭和の昔は任侠映画とかがはやったりしたらしいけど、いまはあんましないよね。弱きをくじき、強きを助けるいまの風潮に反するからなんだろうね。

㊦ 魯の人々は、漢の世になると、学問の伝統を生かして出世しようと志しましたが、朱家はそうした風潮にも背を向け、己の生き方を貫き通しました。

男は微笑み、

それがし

「某はこの通り、これ見よがしの派手ななりをし、朱家には似ても似つかない。

かくかい

郭解がちんちくりんの小男であったと聞けば、なおさら某の及ぶところではない。

我が小さな怒りより、非情にも射殺した獲物を、いかにも得意げに頂戴するといったそう」

男は鵲を手を受け、高らかに笑いました。

男が言った郭解も同じく『史記』に記された義侠の士です。怒りやすくて多くの人を殺し、その一方で助けた人も数知れずいました。

男は笑いながらも、目はじっと私を見据え、その眼差しに、私はふと父を想い

ました。顔付きはまるで似ていません。眼差しの奥にある何かを想わせたの
でした。

私はにゅつと舌先を出し、

「いかがでしょうか、我が舌はまだ生えておりましょようか。『郭解なんぞは法を破
つてばかりの悪人。それを伊達だなどと褒めるのは道理のわからぬ阿呆者だ』と
せせら笑った儒者は、郭解を慕う者に殺され、舌を切り取られたと聞きます。私
も全く同じ類の人間であります」

男は鵠から矢を引き抜き、

「貴公の前で無用な殺生をした。その償いに、貴公がもしも窮鳥となったときに
は、及びもつかぬ朱家や郭解を敢えて気取つて、お救いすることもあろうかな」

「私は貴殿の助けを得てよいような者ではありません。せめて貴殿の手綱さばき、

弓矢の術を見習うべきでありましょう。しけた官員は野を駈けなければ書類の間に鬱屈し、矢を射なければ目にある的は旧例ばかりとなってしまう」

「ならば、ついてまいられよ」

男は馬にまたがり、ぴしりと鞭を当てました。私も続いて馬に乗ると、男は野を横切って小高い丘を登って行きました。私と馬正卿はその後に続き、2人の従者も追いました。

男は最も高いところで馬を止め、弓を差し出し、

「貴公はここで何を射るか。雨を降らさずに人々を苦しめる天であろうか」

私は弓を受け取り、

「射るべきは、我が心より他にはありませんまい」

大地の彼方に我が心の乱れを見据え、射抜こうとしました。きりきりと矢を引

くと、左腕が揺れて止まらず、矢の先はいつまでも静止しませんでした。

「いまの私にこれは使えないようです。お返しいたします」

「惜しいことに、任侠はそれだけでは世を変えられない。だから、任侠は真の勇者のなすところではないひとたびは疑った。しかし、いまは再びそれが我が本分であろうと思っている」

「真の勇者とはいかなる者を言うのでしょうか」

「相手がいかなる者であれ、決して屈することなく報いを為すのを匹夫の剛勇と言う。朱家、郭解の徒は匹夫の剛勇でしかない。某はそれを承知しつつ、断じて身を屈することができない。真の勇者は小事を忍び、遠く志を持って身を屈し、ついには大きな事を為し遂げる。某も我が身を曲げられるのなら、真の剛勇に近づけようか。しかしそれでは某が某でなくなってしまうのを恐れる。貴公が敢え

て矢を向けなかった天をも某は恐れぬと、ことさらに示さずにはいられない」

男は天に向かって矢を放ち、それは遙か虚空に消え、そのまま落ちて来ることはありませんでした。

——ふーん、金ができたり、矢が消えたり、なんか話をおもしろくしすぎじゃない？ いいかげんに盛り上げて、この先は次回についてことかな？ そろそろそんな時刻かな。

㊦ その男と別れた後で馬正卿に尋ねました。

「いまのは誰なのかそなたは知っているのかい。あのようななりで馬を走らせていれば、人に知られずにいまい」

「あの男は名乗らずに走り去りました。いまは申し上げないでおきます。若旦那様ご自身の眼でいかなる人物であるかを見定めるのがよろしかろうと思います」

男の名は知れぬままに強い印象を私に残し、そうこうするうちに12月になり、陳知事からいくつかの県を巡る仕事を与えられました。寒さの盛りには外を回るのは、普通なら勘弁ということかも知れませんが、鳳翔府からしばらくでも離れるのが嬉しくて、私は陳知事の指示を聞きながら、早くもどのような道筋を取ってどこに寄り道しようかなどと思いを巡らせていますと、陳知事ぶつと言葉を切り、

「見ればわかることを、聞く気のないそなたにいちいち言う必要はあるまい」
読み上げていた指示書を投げてよこし、

「これとは別に、二つ頼みたいことがある。公務ではない。返事はその任務を終

えてからでよい」

陳知事が何を言い出したのか、続きは次回にと言ったら、さすがにやりすぎでしょうから、もう少しばかり話をしておきましょう。

一つは、例の金を作る薬方を譲ってほしいということでした。2人の老僧は消えてしまったので、薬方などは一切知らないと言い張ろうかとも思いましたが、つまらない嘘を言うのも腹立たしく、

「世に有用な薬方であるとは思えず、地下に埋めてしまおうとして、なお果たせていません。私がお役目を終えて帰還した後に至っても、知事殿があくまでもご所望とあればここにお持ちいたします」

少しばかり皮肉をまじえた返事しました。

もう一つは、陳知事のために一篇の文章を書くということでした。知事は官舎

の近くにあるちよつとした高まりを整地して、その上に展望台を建てることを計画していました。完成したら脇に石碑を建て、展望台の由来を記した文章を刻もうというのです。

先ほどお話したように飢饉を防ぐための方策が進行中でした。鳳翔府の民衆は御陵の木材を運ぶ仕事ですでに疲れ、その上さらに知事の道楽に付き合わされたのではたまったものではありません。私は即座に拒絶したかったのですが、ことさらに波風を立てるのもどうかと思い、イエスともノーとも言わずに、知事の前を辞そうとしました。

「聞くところでは、そなたは前の知事のために、扶風の駅館の修築を顕彰する文章を記したというではないか。さらに、己自身のために、雨が降ったのを誇って喜雨亭を記念する文書を記したであろう。わしのためには書けないと、そういう

返事はまさかあるまいと思っっているが、どうだ」

「もとより不才の私、時の巡りに恵まれて思いのほかすらすら書けることもあれば、いくら努めても一字も書けないこともあります。軽々にお引き受けして、いざとなつてできないようではまことに申し訳ないので、今度のお仕事を終えて後に、高台のあたりをよくよく見て、じっくりと思案した上でご返事いたしたいと思います」

——箱モノ行政つてヤツかな。パワハラ知事を称えるゴマすり文章を書いたら、いままでのゴタゴタはチャラにしてやるよつてことかもね。どこまでもヤな感じだね。

ⓧ 鳳翔府を出て各地を巡り、12月14日のことです、夜に入って雪が落ちて来ました。雪は翌年の豊作を約束する吉祥とされ、まして雨が少なくて困っていた時期ですから、喜ばしい思いで、暗い天より舞い降りて来る雪を手を受け、昂揚した気分のまま、夜の明けるのも待ち切れずに、早くに旅宿を飛び出しました。雪は止んでいましたが、外は真白の雪景色に変わり、「雪見にころぶところまで」ではありませんけれど、馬に任せてあたりを走り、いつしか南溪なんけいという川に至りました。

兩岸に雪が積もった南溪の景色は、

とてもではないが値がつけられない。

雪の消えないうちにと馬を走らせて来て、

木々の間から抜け出て、

雪の中より道を探し、

まだ足痕のない朱塗りの橋を一番に渡った。

興に乗じてなおも行くと、崩れた家があった。

この家の人は雪に埋もれてどうやって眠ったのだろうか。

さらに小さな村に行き着くと、

ひっそりとして人の声が全く聞こえない。

人々はすでに飢餓に迫られているのか。

年の暮れの鳥の鳴き声だけがあたりにこだまする。

我が馬の足音に、鳥が驚いて飛び立ち、

枯れた枝からはらはらと雪のかけらが落ちて来た。

——これはさあ、「アホー、アホー」って、カラスに叱られたっていう詩かな？　そうだね。だって、官僚になってから、やっと人々の暮らし向きが詩に出てきたんだもの。「世界の片隅」にようやく目が向いたんだよね。遅すぎだよって、カラスに言われたんだね。

㊦ その通りです。鳥に冷たい雪をかけられ、胸に突き刺さるものがありました。楊耆に会い、鵲を射た男に会い、そしてこの鳥に会って、私は官員として重大な岐路に立っていると感じました。

私は2年前に鳳翔に来てすぐに着任報告書を宰相に提出しました。新たな任に就いた者は誰もがこれからの抱負などを記して出すことになっていて、私はその

中に、鳳翔府が直面する大きな問題の一つとして、お上の御用が民業を破綻に追いやっているということがあるのではないかとの指摘を入れておきました。というのも、数年前に科挙を受けるために都を向かう途中に鳳翔府のあたりを通った際には、大きな屋敷を構え、いかにも豊かな暮らしを営んでいる農家が数多くあるのを見ました。鳳翔府に赴任してみると様子がかなり異なり、そのような大きな農家はほとんど見当たりませんでした。聞けば、資産のある自営農家は年々減少の一途だということで、その原因として考えられるのはお上の御用でした。私が携わった木を運び出すような仕事は、税金と同様に民衆に振り分けられ、負担に耐え得ると見なされた豊かな農家がその担い手となります。もしもお上の指示通りに仕事ができなかったり、不慮の事故で損失が出たりしたときには、全てが自己責任となってお上に対して弁済しなければなりません。特に鳳翔府は、西方

で軍事的衝突があつてからは軍用物資の輸送路に当たり、民衆の負担が何倍にもなつて、大きな農家が次々に破綻に追い込まれたのでした。

このことは国家の仕組みに由来するので、都の方々に問題の所在を知っていたかねばならないと着任の報告書に記したのです。私はそれで地方官としての役目は果たせていたように感じていたのですが、烏に雪をかけられて大変な勘違いだったと気付きました。問題の所在を明らかにしただけで満足して、私は人々の暮らし向きにそれ以上には目を向けようとしていなかったのでした。

繰り返し私の短所が露呈し、ではどうしたらいいのかと考えつつ残りの任務をこなして、鳳翔府への帰路に付きました。そのときの足取りはなかなか重いものがありました。

いよいよ今日のうちには鳳翔府に着くという日、例の鵠を射た男とまた出つく

わしました。例によって男は2人の従者を連れて狩をしていました。獲物を射て木立の脇に馬を止め、次なるものを求めて四方に鋭い視線を送り、それが私を捉えました。男はさっと腕を挙げ、私が応じると、男は馬の首を南に向け、鞭を当てて走り出すのと同時に、私も馬を走らせました。

しかしとても付いて行けるような速さではなく、遥かに遅れて目だけで追い、任侠に生きる男と官員である自分とはともに走れないと知り、私は馬を止めました。男もすぐに馬を止め、振り返りました。

「どうした。なぜ来ない」

男の叫びに、私はゆっくりと近づき、

「このように馬の脚が重くては、貴殿のようにとはとても走れません」

「重いのは馬の脚ではあるまい。帰心矢の如しと言いはするが、その逆であると

きには、馬も重い心を支え切れないのであろう」

「私のことがわかるのですか」

「わからないようなら、朱家や郭解を気取ろうなどとはもとより思いもしない」
全てを見通されているように感じ、この男とは生きる世界が異なるのだから、
いまの心の重さを打ち明けてもよからうと思ひ、

「つかぬことを聞きますが、終南山しゆうなんざんとはどの山か、教えてはいただけませんか
ようか」

男は顎の下を叩いて「ふっ」と笑い、

終南山の北の嶺が高くそそり立ち、

積もった雪が、天に浮かぶように雲の端に接する。

山裾の林の広がり、

晴れ上がった青空を映して、

いよいよ鮮やかに冴え渡って来ると、

長安では年の瀬の寒さが一段と増す。

詩を吟じ終わると、南にひとときわ高くそびえる嶺を指差し、

「ここで終南山がどれかと尋ねられたのは初めてだ。太陽とはどれかと聞かれ、あれと示すようなものであろうか」

——えーと、いまの詩はその男が即興で詠んだの？　なんか話の流れが見えなくなっただけ、終南山ってどういう山？



これまで太白山と言っていたのがすなわち終南山です。唐の都の長安や鳳翔のあたりでは、富士山とまでは言わずとも、丹沢のように目立つ山です。詩は祖詠そえいという人の作です。祖詠は唐の人で、杜甫の少しばかり先輩です。開元12（724）年に科挙を受験し、「終南に余雪を望む」という題で詩を作れという課題に、この詩を作りました。試験の答えは5言12句の形式で作らなければいけないのに、わずか4句を書いたところで「意は尽きた」と筆を置いて提出しました。形式を全く満たしていなかったのにもかかわらず祖詠は合格しました。

むろん終南山がどれだかわからなくて男に尋ねたのでありません。

私は言いました。

「ある人が鳳翔に来て数カ月も経ってから、南に高くそびえる山の存在に初めて

気が付き、あれは何かと人に尋ねました。あれこそがかの有名な終南山であると聞いて、いかなる風流心が芽生えたものでありましょうか、朝夕にあの立派な山を眺めて過ごしたら大層気分がよろしかりうと、高台を築こうと思ひ付きました。飢饉が心配されるこの時期であるのに、道楽にもほどがあると、悪い評判が立つのを気にしたのでしようか、その人の下で働くある文章家に碑文を書かせることにしました。文章家は、その人との関係がかなりこじれていて、ここでその人の非を覆うような文章を書けば関係の修復が期待できる一方で、執筆を断りでもしたら鳳翔を去らねばならないと、難しい選択を迫られました。文章家は地位に恋々とする者ではないのですが、我が使命を改めて知ったばかりのときで、いまは職を棄てるわけにはいかないのです」

——それってまさしくトバー君のことだよな。パウハラ知事さんは、そんなに目立つ山に気付かずにしたの？ 勘ぐると、目が節穴で気が付かなかったというのではなくて、仕事に専念して山に目を向けるヒマもなかったってことだと、トバー君が察して、そのように書いたらいいなってことなのかもね。なかなか巧妙かも。

㊦ 男はことさらに高らかに笑い、

「その文章家に言ってやるといい。平気で諂へつらいの文章を書くような奴原やつばらは人民にとつて迷惑でしかない。文は人そのものである。諂へつらいの文章が書けるのは根っからの諂へつらい人間だからだ。文章をもつて稼かせごう、地位を得よう、名を立てよう、人をうならせようなどと思うのは、下卑た文章屋だ。己の思うがままに書く、そ

れが真実の文章ではないのか。祖詠は試験の場でも『意は尽きた』と筆を置いた。詩も文章も同じであろう」

そのように言うのを聞いて、男の眼差しが父に似ると感じた理由がわかりました。男も恐らく一度は科挙を目指した経験があり、しかし別の道を選んだのでしよう。父も科挙は己の目指すものではないと見切り、己の思うがままに思索し書くために、徹底して歴史を学び、独自の文章スタイルを追求したのでした。

胸のつかえがにわかになり、書くか書かないかで悩んでいたのが馬鹿馬鹿しく思えて来ました。私はもとより己の思うがままにしか書けません。書きたければ書けばいいし、書きたくなければ書かなければいいのです。私が書いたのを見て陳知事が憤慨し、私が辞めるようになったら、それはそれで仕方ありません。だとしたら、鳳翔府で仕事ができるのは高台の建設が完了するまで、せいぜい春の

間までとなるでしょう。ならば、官員としていまでできることをいま行う、要するにそれだけのことだと、私は即座に思い至りました。

もはや包み隠すことは何もないと、私は男に我が名を告げ、ここの民衆の疲弊はどこから来ているのか、それに対してどのような方策があるだろうかと率直に尋ねました。

「某は無頼を気取るだけの田舎のやくざ者だ。非を見れば怒りを発して抑えることができず、救いを求められれば助けずにはいれない。己の力の及ぶ及ばぬの分別を持たない。」

某はかつて貴公が書いた『刑賞は忠厚の至り』を読んだ。大層よい答案であろうということにはわかった。貴公は、後世には伝えられなかった事実をそこに引いた。貴公はいま受験生ではなく、官員として罰や賞を与える立場にある。賞や罰

は事実在即して与えるものではなくてはなるまい。事実はその全てが明らかになつて貴公の目の前にあるのではない。ないものを見る、あるいはあるものを見ないということであつては、終南山がそこにあるのを気付かずに行った人を笑うことはできない。

某は貴公のように国の仕組みなど何も知らぬ。貴公はこの民は疲弊していると見ているが、誰かの悲嘆の声を直接聞いたのか。どの家がいつの年にどのような破綻したのかを知っているのか。真実は終南山の如くに大きく聳えたところだけにあるのではない。恐ろしいばかりに微細な枝葉末節にもある。とするならば、貴公ばかりでなく、某にも何かしらできることがあるのではなからうか」

——枝葉末節かあ。さつきも言ったけど、問題の本質を見抜いたらそれでOKっ

てことではないんだよなあ。

介護の仕事でもさ、いろいろごたごたすると、「チームワークが大切です。みんなでがんばりましょう」みたいなことをいって乗りきろうとするのは、「そりあそうでしょうよ」となるだけで、なんの解決にもたぶんならないんだよ。本質はそりゃあチームワークですよ。教科書にだってチームワークが大切って書いてありますよ。だけど、現場は微細な枝葉末節、恐ろしく泥臭いことのテンコ盛りで成り立っているんだよ。そこんところを、ひとつひとつ解きほぐしていかないと、ダメなんだ。「チームワークが大切です」と後生大事に唱えるよりも、ごくごくつままないグチにうなづく方がずっと大事だったりするんだよ。ボクもこのごろになつてそんなことがわかってきたんだけど。

㊦

あなたのいまの話をつ900年前に聞いていたらきつとよかったのでしょう。

男に言われたことを実際にどうしたら活かせるのだろうかと考えていると、男はもう一つ別のことを言い出しました。

こうゆう

「皇祐元（1040）年といえば、貴公は何歳であつたらうか」

「15歳でありました」

「ならば聞き及んでいようか。この年、范仲淹は杭州知事になって2年目、あたり一帯は飢饉の様相を呈し、范仲淹は官の備蓄米を放出したり、裕福な者から支援物資の提供を募るなどの対策を採った。その一方で、杭州の人々が楽しみとする春から夏の競艇は例年通り実施させ、知事自身もしばしば湖のほとりに出て見物に興じた。また、仏教関係のお偉方を集め、『飢饉の年には工賃が下がる。事業を興すに好都合であろう』と、寺の修復、造営を行うよう促し、多くの寺院がそ

のようにした。官もまた幾つもの建築物を新たに造った。范仲淹のこうした行動に対して、『飢饉の年に遊興に耽り、民力を消耗させている』と弾劾する声が相次いだ。范仲淹は動ずることなく己のやり方を貫き、結果として、杭州以外の地域では、飢餓に迫られた者が流民となり、道端に多くの遺骸がころがるありさまにまでなったが、杭州では零細民が皆仕事を心得て流民とならずにすみ、餓死者が出なかつた」

「男はそして高らかに歌つたのでした。

「天下に先駆け心に憂い、

民の手を助け喜ぶを待ち、

天下に後れておく楽しみをなす、

手本は一徹、范仲淹。

——ちよつとお、いまの歌はウソだよ。でもさあ、范仲淹がしたのは、世界恐慌後のニューディール政策とおんなじだったりしない。ボクも一応は世界史を取ったから、そんなくらいのはわかるよ。ということは、パワハラ知事が高台を築くというのも実は道楽ではなくて、おんなじってことだったりするのかな。

① 「手本は范仲淹」と言っているながら、ここでも私は少しも手本にしていなかったのです。私は愕然とし、次の瞬間にはからりと心が晴れたような気持ちになりました。自分が7歳のときに志した最初に立ち戻ればいいだけとわかったからです。

男と別れて鳳翔府に帰ってその後がどうなったのか、今夜も話が長くなりましてので、この先は次回ということにしましょう。

——クイズ番組で、答えはお知らせの後でって、CMをはさみこむような感じだね。CMが終わるのが待たなくて、答えをスマホで検索しちゃったりするみたいに、ボクも叔父さんに聞けば、たぶん教えてもらえるだろうけど、そこまでする思い入れはないから、すなおに次回の楽しみとしておくよ。

* * *

イノ君は、最後に言っていた通りに、その後の展開について私には何も聞いてこなかった。鵠を射抜いた男が何者であるのか、私にはすぐにわかったけれど、

イノ君には黙っていることにした。

イノ君も指摘していたように、録音を聞いていて、トバー君の話術が妙に巧みになったと私も感じた。「寅ひよの Aria」と言われる名調子を彷彿とさせ、ますますフーテンの寅さんに似ている思わずにはいられなかった。だとすると、トバー君は時空の彼方で風任せ波任せの旅をしているということなのであろうか。その父のようにしたかったと言っていたことでもあるし……。